

# 中池ノ内遺跡

主要地方道倉敷成羽線  
建設に伴う発掘調査

1996

岡山県教育委員会

# 中池ノ内遺跡

主要地方道倉敷成羽線  
建設に伴う発掘調査

1996

岡山県教育委員会

## 序

本報告書には、小田郡矢掛町中に所在する中池ノ内遺跡の発掘調査結果を収載しました。

県道倉敷・成羽線は、倉敷市玉島地区から矢掛町の南東部へ入り、矢掛町のほぼ中央を南北に縦断し、成羽町内で国道313号につながっています。倉敷市西部方面と高梁市方面を結ぶものとして、交通量も比較的多い路線といえますが、特に矢掛町の南東部、中地区においては、住宅地の中をぬって走る幅の狭い道路となっており、地域住民の要望もあって、道路整備が行われることになりました。

この中地区の周辺には、芋岡山遺跡など弥生時代後期の墳墓群が知られており、予定地内の畠の一部でも遺物の散布する場所があるため、事前に確認調査を行った結果、遺構の存在することが明らかとなりました。このため、記録保存のための発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が確認され、堅穴住居をはじめとする集落の一部や、土器棺墓、土壙墓といった墓の跡が発見されました。この地点が長い時代にわたって、多様に利用されてきた様子がうかがえます。

これらの成果を収めたこの報告書が、文化財の保護・保存のために活用され、また、地域の歴史を研究する資料として広く役立つならば、これに過ぎる喜びはありません。

最後に、発掘調査にあたっては、岡山県井笠地方振興局、矢掛町教育委員会ならびに関係各位から賜りました多大なご協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

岡山県教育委員会

教育長 森崎 岩之助

## 例　　言

1. 本報告書は、主要地方道倉敷成羽線建設に伴い、岡山県土木部道路建設課の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが平成7年度に発掘調査を実施した、中池ノ内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 中池ノ内遺跡は、当初、中散布地として調査に入ったが、調査によって遺跡が確認されたため名称を変更した。なお、中という地名は非常に広い範囲を指し、他の遺跡も含まれるので、区別するために字名を付して中池ノ内遺跡と呼ぶことにした。
3. 中池ノ内遺跡は、小田郡矢掛町中1415ほかに所在する。
4. 発掘調査は、確認調査と全面調査の2次にわたって行ない、それぞれ、平成7年4月17日～同19日および平成7年5月31日～7月13日の期間に行なった。
5. 発掘調査の担当者は、確認調査が尾上元規、全面調査が松本和男・尾上・小嶋善邦である。
6. 報告書の編集・作成および遺物整理は、尾上が岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において行なった。その過程で、当文化財センターの諸兄より数多くの協力および教示をいただいた。
7. 本文の執筆は、正岡陸夫と尾上が分担して行ない、第2章第1節を正岡が、その他を尾上が執筆した。
8. 本書に使用したレベルの数値は海拔高であり、方位は磁北である。
9. 本書第2図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図「矢掛」を複製し加筆したものである。
10. 出土遺物ならびに図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて保管している。

## 目 次

|                 |   |                |    |
|-----------------|---|----------------|----|
| 第1章 遺跡の位置と環境    | 1 | 第2節 縄文時代の遺物    | 7  |
| 第2章 発掘調査の経緯と経過  |   | 第3節 弥生時代の遺構と遺物 | 7  |
| 第1節 調査にいたる経緯    | 3 | 第4節 古墳時代の遺構と遺物 | 15 |
| 第2節 確認調査の経緯と概要  | 3 | 第5節 中世の遺構と遺物   | 17 |
| 第3節 全面調査の経過     | 4 | 第6節 近世以降の遺構と遺物 | 20 |
| 第3章 発掘調査の概要     |   | 第4章 まとめ        | 26 |
| 第1節 調査区の概略と基本層位 | 6 |                |    |

## 図 目 次

|                      |    |                                |    |
|----------------------|----|--------------------------------|----|
| 第1図 遺跡位置図            | 1  | 第27図 土壙2出土遺物(2)                | 18 |
| 第2図 周辺の遺跡分布図         | 2  | 第28図 包含層出土の中世の遺物               | 18 |
| 第3図 確認調査トレンチ配置図      | 4  | 第29図 包含層出土の鉄器                  | 19 |
| 第4図 確認調査T-3・T-4土層断面図 | 4  | 第30図 土壙3                       | 19 |
| 第5図 調査区北東壁土層断面図      | 6  | 第31図 土壙4                       | 19 |
| 第6図 包含層出土縄文土器        | 7  | 第32図 近世以降の遺構配置図                | 20 |
| 第7図 弥生時代から中世の遺構配置図   | 7  | 第33図 掘立柱建物                     | 21 |
| 第8図 竪穴住居1            | 8  | 第34図 掘立柱建物出土遺物                 | 21 |
| 第9図 竪穴住居1出土遺物        | 8  | 第35図 ピットb出土遺物                  | 21 |
| 第10図 土器棺墓            | 8  | 第36図 土壙5~9                     | 22 |
| 第11図 土器棺墓出土遺物        | 9  | 第37図 土壙6・8出土遺物(1)              | 22 |
| 第12図 土壙墓1~8          | 11 | 第38図 土壙6・8出土遺物(2)              | 23 |
| 第13図 土壙墓9・10         | 12 | 第39図 土壙10                      | 23 |
| 第14図 土壙墓8出土遺物        | 12 | 第40図 土壙11                      | 23 |
| 第15図 土壙1             | 13 | 第41図 土壙11出土遺物                  | 24 |
| 第16図 土壙1出土遺物         | 13 | 第42図 土壙14                      | 24 |
| 第17図 包含層出土の弥生土器(1)   | 13 | 第43図 遺構に伴わない近世の遺物              | 25 |
| 第18図 包含層出土の弥生土器(2)   | 14 | 第44図 矢掛町中地区における<br>弥生時代後期土器の変遷 | 26 |
| 第19図 包含層出土の石器        | 14 | 第45図 後口谷1号墳丘墓出土土器              | 27 |
| 第20図 竪穴住居2           | 15 | 第46図 中池ノ内遺跡と芋岡山遺跡の<br>位置関係     | 27 |
| 第21図 竪穴住居2出土遺物       | 15 | 第47図 土壙墓の主軸方位と規模の比較            | 28 |
| 第22図 ピットa出土遺物        | 15 | 第48図 中世土師器の法量分布(備中地域)          | 28 |
| 第23図 包含層出土の古墳時代の土器   | 16 | 第49図 中世土師器の法量分布(備前地域)          | 29 |
| 第24図 包含層出土切子玉        | 16 |                                |    |
| 第25図 土壙2             | 17 |                                |    |
| 第26図 土壙2出土遺物(1)      | 17 |                                |    |

## 表 目 次

|                            |    |                            |    |
|----------------------------|----|----------------------------|----|
| 第1表 縄文時代～中世の土器観察表(1) ..... | 30 | 第3表 縄文時代～中世の土器観察表(3) ..... | 32 |
| 第2表 縄文時代～中世の土器観察表(2) ..... | 31 |                            |    |

## 図版目次

|     |             |     |                 |
|-----|-------------|-----|-----------------|
| 図版1 | 1 遺跡遠景      | 図版5 | 1 包含層出土縄文土器     |
|     | 2 壺穴住居1     |     | 2 壺穴住居1出土遺物     |
|     | 3 土器棺墓      |     | 3 土壙1出土遺物       |
| 図版2 | 1 土壙墓1～3    |     | 4 土器棺・壺(棺身)     |
|     | 2 土壙墓5～9    |     | 5 土器棺・鉢(棺蓋)     |
|     | 3 土壙墓10     |     | 6 包含層出土の石器      |
| 図版3 | 1 壺穴住居2     |     | 7 壺穴住居2出土遺物     |
|     | 2 土壙2土器検出状況 |     | 8 ピットa出土遺物      |
|     | 3 挖立柱建物     |     | 9 包含層出土の古墳時代の遺物 |
| 図版4 | 1 ピットb瓦出土状況 | 図版6 | 1 土壙2出土遺物       |
|     | 2 土壙5断面     |     | 2 包含層出土の中世の遺物   |
|     | 3 土壙6断面     |     | 3 近世の陶磁器        |
|     | 4 土壙7       |     | 4 近世の瓦          |
|     | 5 土壙8断面     |     |                 |
|     | 6 土壙8礫出土状況  |     |                 |
|     | 7 土壙9礫出土状況  |     |                 |
|     | 8 発掘作業風景    |     |                 |

# 第1章 遺跡の位置と環境

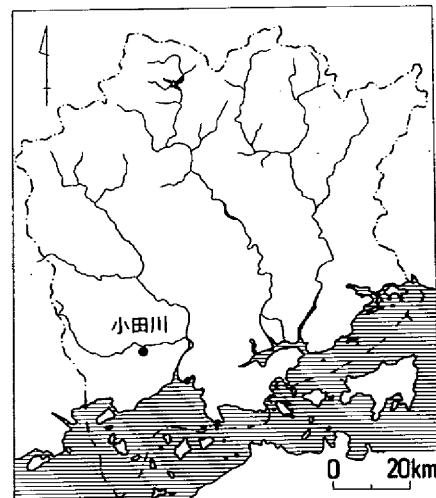
中池ノ内遺跡は、岡山県の南西部、小田郡矢掛町中に所在する。矢掛町は、高梁川の支流である小田川の氾濫原を中心として形成された町であり、近世に山陽道の宿場町として栄えたことで有名である。中地区は、矢掛町のなかでも南東部の、小田川南岸に位置している。南方から小田川に注ぎ込む道々川が広い扇状地を形成しており、その扇状地の南東隅付近が中池ノ内遺跡の所在地となっている。この扇状地には現在も広い水田が開かれており、古くからこの地域の経済基盤としての役割を果たしてきたものと考えられる。実際、この扇状地を取り囲む山裾部を中心として、弥生時代から中・近世にいたる幅広い時代の遺跡や遺物散布地が多数知られており、弥生時代以降、稻作を基盤とした人々の生活の跡がうかがえる。

矢掛町内で、人々の生活の痕跡として知られる最も古いものとしては、東三成・奥迫遺跡<sup>(1)</sup>出土の縄文早期の押型文土器や縄文時代後・晚期の土器があり、今回調査した中池ノ内遺跡からも、縄文時代晚期の土器片が出土しているが、遺跡数としてはあまり知られていない。

弥生時代になると、多くの遺跡が知られるようになる。前期の調査例として壺棺が出土した東三成・吉野遺跡<sup>(2)</sup>がある。中期では、小田川流域の広い範囲で遺跡が存在するようになり、後期になるとさらに増加するようである。今回、中池ノ内遺跡でも弥生時代中期から後期の遺構・遺物が確認されたが、周辺でも、この時期の集落遺跡である白江遺跡<sup>(3)</sup>や、後期の集団墓地である芋岡山遺跡<sup>(4)</sup>がよく知られている。芋岡山遺跡では、特殊器台形土器をはじめとする祭祀土器が多数出土しており、この地に権力をおいた首長の姿を垣間見ることができる。

古墳時代には、多数の古墳が築造されている。中池ノ内遺跡の周辺では、芋岡山古墳群<sup>(5)</sup>や江本裕安寺谷古墳群が箱式石棺等の主体部をもつ古墳時代前半期のものと考えられ、安居寺谷古墳群、池尻古墳群、橋本古墳群などが古墳時代後期の横穴式石室墳を中心とする古墳群である。また、中池ノ内遺跡の南方約1km、南山田の盆地に面した丘陵の中腹部には、著名な終末期の方墳である小迫大塚古墳<sup>(6)</sup>が築かれている。一辺20数mを測る墳丘をもち、全長10.7m、玄室幅2.4mの非常に整った大形の横穴式石室を内部主体としている。終末期の古墳としてはかなり大形のものであり、この地の勢力の大きさを物語っている。

続く奈良時代の主要な遺跡は、古代山陽道沿いを中心に知られている。東三成・下道氏墓所からは、元禄年間に「和銅元年」の銘が刻字された吉備真備祖母の銅製骨蔵器が発見されており、国指定の史跡となっている。そのほか、山陽道の「駅家」の可能性をもつ浅海・毎戸遺跡<sup>(7)</sup>があり、陶硯や瓦、「馬」字の線刻土師器などが出土している。また東三成・瓦谷からは、平城宮式瓦が出土しており、寺院跡と推定されている。山陽道沿い以外では、県営圃場整備事業に伴う確認調査によって、中地区より円面硯が出土しており、小田郡衙等、官衙跡の可能性が説かれている<sup>(8)</sup>。また、時期は不明確であるが、中地区をも含めて小田川流域の扇状地には、条里制地割



第1図 遺跡位置図

## 第1章 遺跡の位置と環境



第2図 周辺の遺跡分布図 S=1/40,000

- |              |           |              |           |
|--------------|-----------|--------------|-----------|
| 1 中池ノ内遺跡     | 2 官衙推定遺跡  | 3 芋岡山古墳群     | 4 芋岡山遺跡   |
| 5 江本裕安寺谷古墳群  | 6 安居寺谷古墳群 | 7 白江遺跡       |           |
| 8 王子の塚古墳     | 9 船ヶ迫山城址  | 10 小迫大塚古墳    |           |
| 11 本覚寺境内中世墓地 | 12 焼山城址   | 13 池尻古墳群     | 14 橋本古墳群  |
| 15 三頂山古墳群    | 16 四頂山古墳  | 17 畦中古墳群     | 18 土井古墳群  |
| 19 蝶の頭古墳     | 20 茶臼山城址  | 21 伝弾応寺址中世墓地 |           |
| 22 中山古墳群     | 23 若林古墳群  | 24 伝山本城址     | 25 要ガイ山城址 |
| 26 妙泉寺境内中世墓地 |           |              |           |

### 註

- (1) 高畠知功「奥迫遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』60 岡山県教育委員会 1985年
- (2) 宇垣匡雅「吉野遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』22 岡山県教育委員会 1992年
- (3) 間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」「倉敷考古館研究集報」第1号 1966年
- (4) 間壁忠彦・間壁霞子「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」「倉敷考古館研究集報」第3号 1967年
- (5) 間壁忠彦「岡山県下の人骨を出土した小古墳六例」「倉敷考古館研究集報」第4号 1968年
- (6) 藤田健司・伊藤晃「小迫大塚古墳」「岡山県史」第18巻・考古資料 1986年
- (7) 下澤公明・大谷猛「毎戸遺跡の調査」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」5 岡山県教育委員会 1974年
- (8) 桑田俊明「白江遺跡ほか」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」80 岡山県教育委員会 1992年

### 参考文献

『矢掛町史』本編・史料編 矢掛町史編纂委員会 1982年

りのみられるところが多い。

中世には、多数の山城が築かれるようになる。中でも矢掛町の東端に位置する猿掛城は備中南部最大の規模を誇る。山城以外では、町内の各地に中世墓地が知られている。寺院の境内に残っているものが多いが、五輪塔・宝篋印塔が多数みられる。また、上述した扇状地縁辺部の広い範囲に認められる遺物散布地の中には、中世の遺物を含むものも多く、集落も数多く存在していたものと考えられる。

以上のように、中池ノ内遺跡周辺は、近世に宿場町として栄える以前にも、縄文・弥生時代からさまざまな面において、歴史上重要な役割を果たしてきたことがうかがえる。

## 第2章 発掘調査の経緯と経過

### 第1節 調査にいたる経緯

県道倉敷成羽線の小田川にかかる中村橋の改築に伴い、その取付道の改良事業が実施されることになった。事業は平成5年度から用地買収にかかり、平成8年度の完成が予定されている。取り付け道内の江本池付近には、土器片の散布がみられ、中散布地の広がりが想定された。そのため、平成4年1月から県土木部道路建設課および井笠地方振興局建設部と文化課が協議を行ない、埋蔵文化財の調査計画を立ててきた。

当初の計画では、平成5年度に確認調査を行ない、その結果をもって平成6年度に全面調査に入る予定であった。しかし、用地買収が当初の計画より遅れ、平成6年度も調査を行なうことができなかつた。条件の整った平成7年4月にトレンチ調査を行ない、一部に弥生時代から近世の遺構・遺物が確認された。そのため、この地区について平成7年6月から7月にかけて全面調査を実施した。

なお、調査予定地に隣接し、矢掛町が圃場整備を計画していて、矢掛町教育委員会とも連絡を取りながら調査を進めてきた。

#### 調査体制

##### 岡山県教育委員会

|               |        |
|---------------|--------|
| 教 育 長         | 森崎 岩之助 |
| 教育次長          | 黒瀬 定生  |
| <b>文化課</b>    |        |
| 課 長           | 大場 淳   |
| 課長代理          | 樋本 俊二  |
| 参 事           | 葛原 克人  |
| 課長補佐(埋蔵文化財係長) | 高畠 知功  |
| 主 任           | 若林 一憲  |

##### 岡山県古代吉備文化財センター

|         |       |
|---------|-------|
| 所 長     | 河本 清  |
| 次 長     | 高塚 恵明 |
| 次 長     | 葛原 克人 |
| (文化課本務) |       |

##### (総務課)

|            |       |
|------------|-------|
| 総務課長       | 丸尾 洋幸 |
| 総務主幹       | 守安 邦彦 |
| 課長補佐(総務係長) | 井戸 丈二 |
| 主 査        | 石井 善晴 |
| 主 任        | 木山 伸一 |

##### (調査課)

|            |       |
|------------|-------|
| 調査第一課長     | 正岡 隆夫 |
| 課長補佐(第一係長) | 松本 和男 |

##### (全面調査担当)

|               |       |
|---------------|-------|
| 主 事           | 尾上 元規 |
| (確認調査・全面調査担当) |       |
| 主 事           | 小嶋 善邦 |
| (全面調査担当)      |       |

### 第2節 確認調査の経過と概要

確認調査は、平成7年4月17日から19日の3日間で行なった。路線予定地内の遺物散布地点およびその周辺について、計4か所のトレンチ(総面積40m<sup>2</sup>)を設定し、遺跡存在の有無とその範囲の確認を行なった。この地点は、傾斜地をカットし埋めることによって地表レベルの異なる段々の畑地とされているため、畑一面につき1か所のトレンチを設定し、調査した(第3図)。T-4からT-

## 第2章 発掘調査の経緯と経過

1に向かって北から順番に調査を進めた。

T-1、T-2については、現在の畑耕作土を除去すると地山が露出する状況で、いずれも遺構は確認されなかった。T-1では遺物の出土は皆無で、T-2では耕作土中より若干の遺物が出土したが、畑の造成および耕作により搅乱を受けた状態であった。

T-3（第4図）では、地表から60cm程度の深さで、遺物を多く含む黒褐色土層（3層）が認められ、ピット等の遺構も確認された。遺物は中世のものが中心で、その時期の遺跡が存在することが推定された。なお、それより下層においては遺構、遺物ともに確認されなかった。

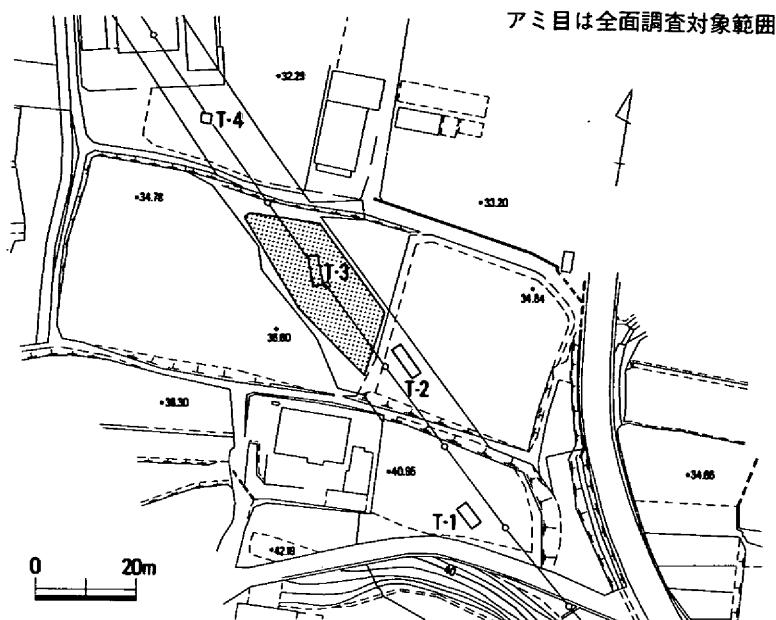
T-4（第4図）では地山の上に数層の土層が堆積している状況がみられたが、T-3で確認された中世のものと思われる包含層は認められなかった。遺物は中世のものをはじめとして出土したが、地表付近から現代の陶器類の破片と一緒に検出される状況で、著しく搅乱を受けていることが推定された。畑地造成の際に搅乱されたものと思われる。

以上の確認調査の成果に基づき、T-3を設定した畑一面分についてのみ、全面調査の対象とした（第3図）。

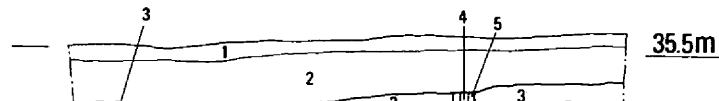
## 第3節 全面調査の経過

全面調査は、平成7年5月31日から同7月13日にかけて行なった。

確認調査の成果に基づいて、中世のものと考えられていた包含層の直上までの予定で、重機によって掘り下げを開始した。ところが、表土（耕作土）を除去した段階で、近世のものと思われる柱穴等



第3図 確認調査トレンチ配置図 S=1/1,500



1. 黒褐色土（耕作土）  
2. 暗褐色土  
3. 黒褐色土（包含層）  
4. 暗灰色土（柱痕跡）  
5. 黒褐色土（柱穴埋土）  
6. 暗灰褐色土  
7. 暗褐色土



第4図 確認調査T-3・T-4土層断面図 S=1/80

の遺構が検出されたため、表土直下でいったん掘り下げを停止し、この面の遺構を調査することにした。この面においては、近世のものと思われる掘立柱建物1棟、土壙多数が確認された。

近世の遺構の調査を終えた後、確認調査で認識されていた包含層まで掘り下げを行ない、遺構の調査を行なった。この包含層は、確認調査時には中世のものと考えていたが、中世の遺物のほか、弥生時代、古墳時代の遺物も多く含んでいることが明らかとなつた。包含層下面からは、弥生時代、古墳時代、中世の遺構が多数検出され、その調査に約2週間を要した。調査の大部分が終了した7月第2週目、梅雨の長雨で1週間全く作業ができなかつたが、翌週、撤収作業と重機による埋め戻しを行ない、発掘調査を終了した。

### 日誌抄

- 5月31日（水） 発掘調査開始、重機による表土除去開始
- 6月1日（木） 発掘用資財搬入、重機による表土除去終了
- 6月15日（木） 近世遺構面の調査終了
- 7月10日（月） 弥生時代から中世の遺構面の調査終了
- 7月11日（火） 発掘用資財の搬出
- 7月12日（水） 重機による埋め戻し開始
- 7月13日（木） 重機による埋め戻し終了、発掘調査終了



調査区北半部 弥生時代の遺構調査風景（西から）

## 第3章 発掘調査の概要

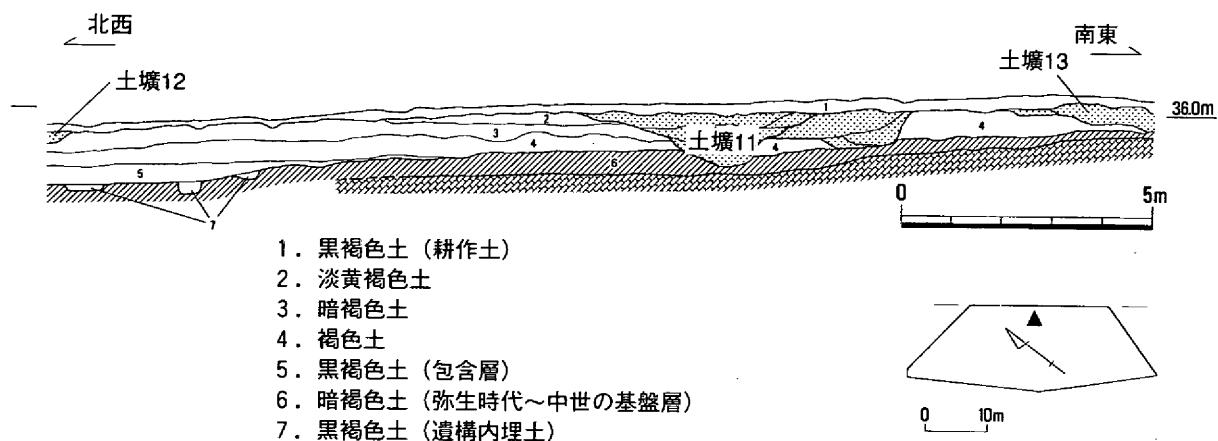
### 第1節 調査区の概略と基本層位

確認調査の成果に基づいて、全面調査発掘区を設定した（第3図）。上述したようにこの地点は、現在畑として利用されており、ほぼ平坦な地形であるが、もともとは南から北に向かって緩やかに傾斜する斜面であったと考えられる。山側をカットし、谷側を埋め立てるかたちで造成が行なわれている。

調査区北東壁の土層断面図を第5図に示しているが、遺構面は計2面が確認された。近世以降の遺構面と、弥生時代から中世の遺構面である。表土（1層）を除去するとすぐに近世の遺構面に達する。図示した断面図には表れていないが、調査区の南隅付近では表土直下で地山が露出する状況であり、地山に近世の遺構が掘り込まれている。このような状況から、おそらく現在の地形のように、斜面をカットして平坦地に造成されたのは、近世の段階であったと考えられる。近世の遺構面は、現地表とほとんど変わらない傾斜を示している。

近世の遺構面の下には、計3層の自然流土および造成土と考えられる土層が堆積しており（2～4層）、さらにその下に、主として調査区北半部のみであるが、黒褐色を呈する遺物包含層（5層）が存在する。この包含層には、縄文時代から中世にいたる遺物が混在している。また、その下面、すなわち6層上面が弥生時代から中世の遺構面となっており、さまざまな時代の遺構がこの面で同時に検出されている。おそらく中世の段階で、それ以前の遺構を削る形で全面的な削平がなされ、その上からさらに中世の遺構が掘り込まれたものと考えられる。なお、中世の段階では、まだ地形は南に向かって高くなっていたようであり、調査区の南半部分では中世までの時代の遺構はほとんど確認されていない。近世における造成時に遺構も破壊されてしまったものと思われる。

以上のように第5図の6層は、弥生時代から中世における基盤層となっているが、厚さ50cm前後のこの層を除去すると地山面に到達する。調査区内から縄文土器が出土しているため、6層の下にも遺構面が存在する可能性が考えられ、調査区内の一部をトレーニング状に地山面まで掘り下げて調査したが、遺構、遺物ともに全く確認されなかった。



第5図 調査区北東壁土層断面図 S=1/150

## 第2節 縄文時代の遺物

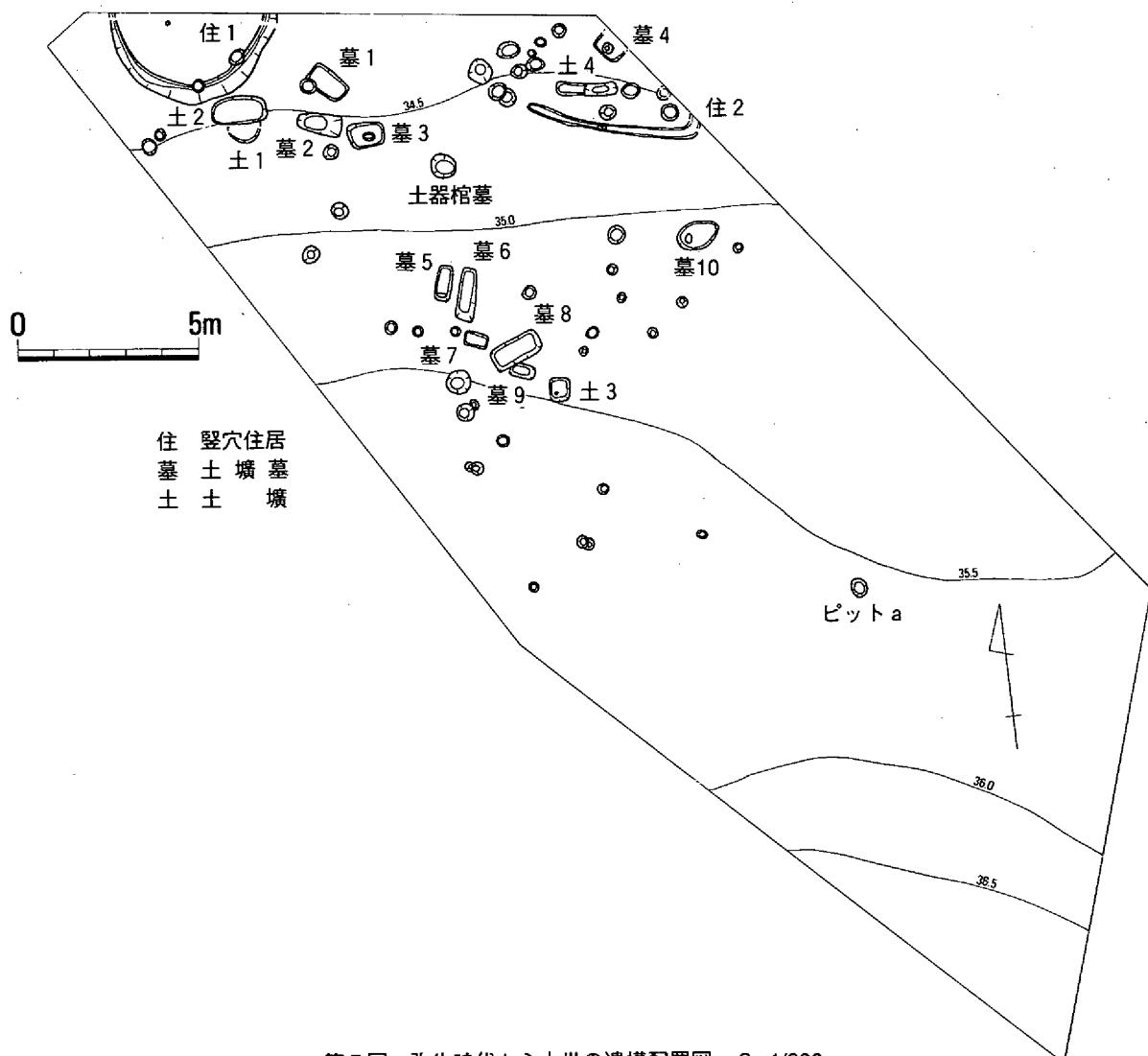
調査区内包含層より、縄文土器片が若干出土している（第6図）。いずれも縄文時代晚期の、刻目突帯文を有する深鉢形土器である。口縁直下の外面に断面三角形の突帯を張りつけ、刻目を施している。突帯は1よりも2の方が幅広く、2の刻目は押し引き状を呈する。口縁端部は1が薄くならずに丸くおさめられているのに対し、2は薄くなって外反し、端部は尖り気味である。これらの縄文土器に伴う遺構は確認されていない。



第6図 包含層出土縄文土器 S=1/4

## 第3節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、古墳時代から中世の遺構とともに、調査区の北半部を中心に検出されている。弥生時代の遺構としては、竪穴住居1軒、土器棺墓1基、土壙墓10基、土壙1基と、柱穴多数がある。ただし柱穴は、検出面や埋土の状況が、古墳時代から中世のものと同様で区別できないため、時代を特定できないものが多い。



第7図 弥生時代から中世の遺構配置図 S=1/200

### 第3章 発掘調査の概要

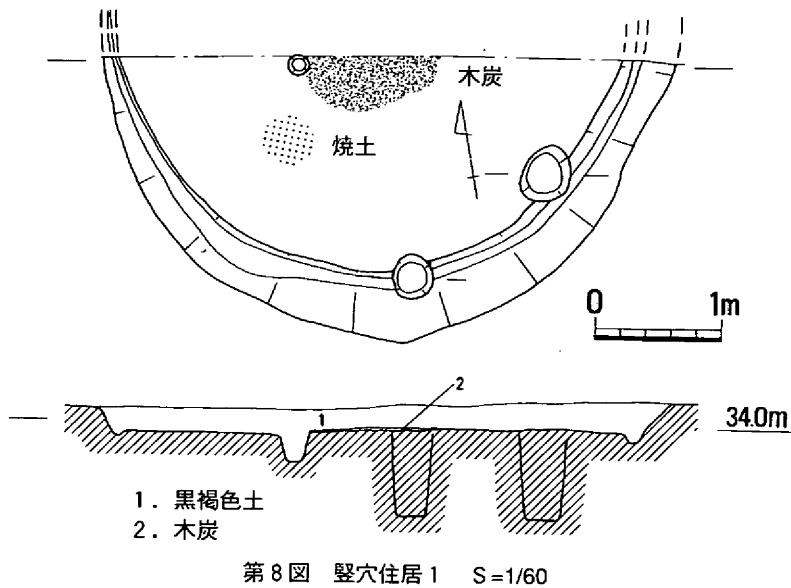
#### 竪穴住居1（第8図）

調査区の北辺にかかる状態で、約半分が検出された。直径約4.5mの円形を呈し、床面から20cm前後が残存していた。中央にピットはなく、かわりに中央付近に直径約1mの範囲で床面直上に著しい木炭の分布している箇所がある。また、それから50cm程離れた場所には、少量の焼土が散布していた。中央の木炭分布部分の脇には径10数cmの小ピット

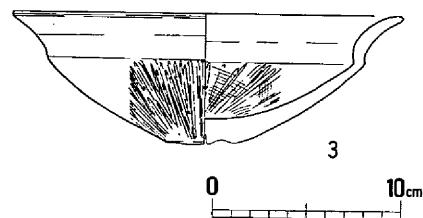
が存在する。また、この住居に伴うと考えられる明確な柱穴は確認されなかった。図示している2つの柱穴がその可能性をもつものの、いずれも壁体溝に重複して掘り込まれており、別の構造物に伴うものと考えたほうがよい。

遺物としては、調査区境に接する西半部分の床面直上から、高杯の杯部のみが完形で出土している（第9図-3）。脚部の破片はみられず、杯部のみが正位置で床面上に置かれていた状況と、脚部との割れ面がかなり磨耗していることから、杯部のみを鉢として使用していたものと考えられる。そのほか、住居内から弥生土器の小片が出土している。これらの出土遺物から、この竪穴住居の時期は、弥生時代の後期後半頃と思われる。

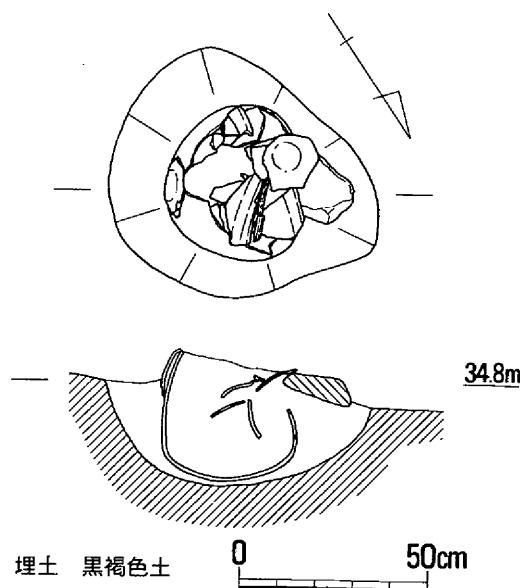
**土器棺墓（第10図）** 調査区北半の中央部分より、土器棺墓が1基検出されている。径70cm程度の掘り方内に、弥生土器を用いた棺がおさめられている。掘り方の検出面からの深さは、約30cmである。棺身には壺を用い、口縁部から胴部上半の一部を丁寧に細かく敲いて打ち欠いている（第11図-7）。その打ち欠いた部分を上に向け、掘り方内に約45°の角度で斜めに壺をおさめている。棺身の置かれた方位は、N124°Eである。棺蓋には、3個体分の土器の破片を用いている（第11図-4～6）。4は鉢で、約1/2の破片を使用している。5も鉢で、約1/6の破片である。6は壺の底部と思われる破片である。これらの土器片を重ね合わせるようにして蓋をしていたものと思われる。棺身、棺蓋とともに、用いられた土器の外面には赤色顔料が塗布されている。なお、検出面付近のレベルにおいて平たい石が検出されてお



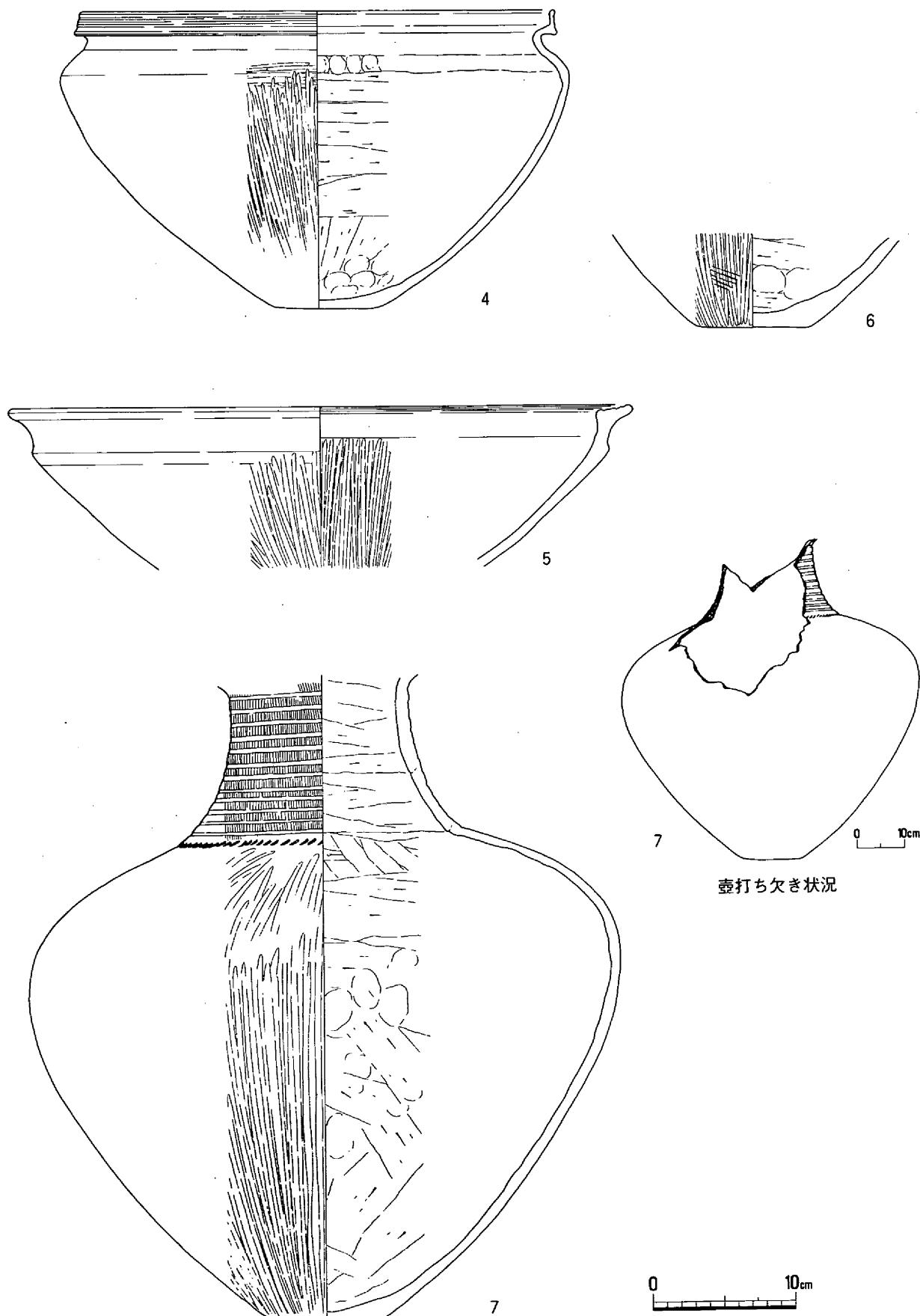
第8図 竪穴住居1 S=1/60



第9図 竪穴住居1 出土遺物 S=1/4



第10図 土器棺墓 S=1/20



第11図 土器棺墓出土遺物 S=1/4

### 第3章 発掘調査の概要

り、これも蓋の一部をなしていた可能性がある。棺身については、丁寧に打ち欠きを行なった壺が使用されているが、棺蓋は、ありあわせの土器の破片を使用したような印象を受ける。

土器棺内の土は水洗を行なったが、副葬品とみられるような遺物はなく、遺体と関連すると思われるものも認められなかった。土器の型式から弥生時代後期後半のものと考えられる。

**土壙墓群（第12図、第13図）** 調査区の北半部、土器棺墓の周辺を中心として、土壙墓と考えられる土壙が計10基検出されている。通常の土壙墓と比べると小形の掘り方をもっており、大きいものでも長さ140cm程度、小さいものでは約70cmの規模しかない。積極的に土壙墓として評価できるかどうか不明なものも含まれているが、土器棺墓の周囲を中心に存在することや、それらの主軸が南北および東西を指向するものが多いこと、また、枕石あるいは小口板と関連すると思われる石材をもつものがあることなどから、一応土壙墓として解釈したい。なお、木棺痕跡を確認できたものはない。

**土壙墓1** 底部で長辺102cm、短辺57cmを測る隅丸方形の掘り方をもつ。深さは10cm程度が残存しているにすぎなかった。主軸の方位はN138°Eである。掘り方内から遺物は出土していない。

**土壙墓2** 検出面で長辺120cm、短辺63cmを測る隅丸方形の掘り方をもち、東側の方が西側よりも幅広くなっている。土壙の壁は急角度で立ち上がりらず、やや丸みを帯びた断面形を示している。深さは20cm程度残存していた。主軸の方位はN110°Eであり、掘り方内から遺物は出土していない。

**土壙墓3** 底部で長辺84cm、短辺60cmを測る隅丸方形の掘り方をもち、西側の方が東側よりも若干幅広くなっている。深さは20cm程度残存していた。主軸の方位はN84°Eであり、掘り方内から遺物は出土していない。

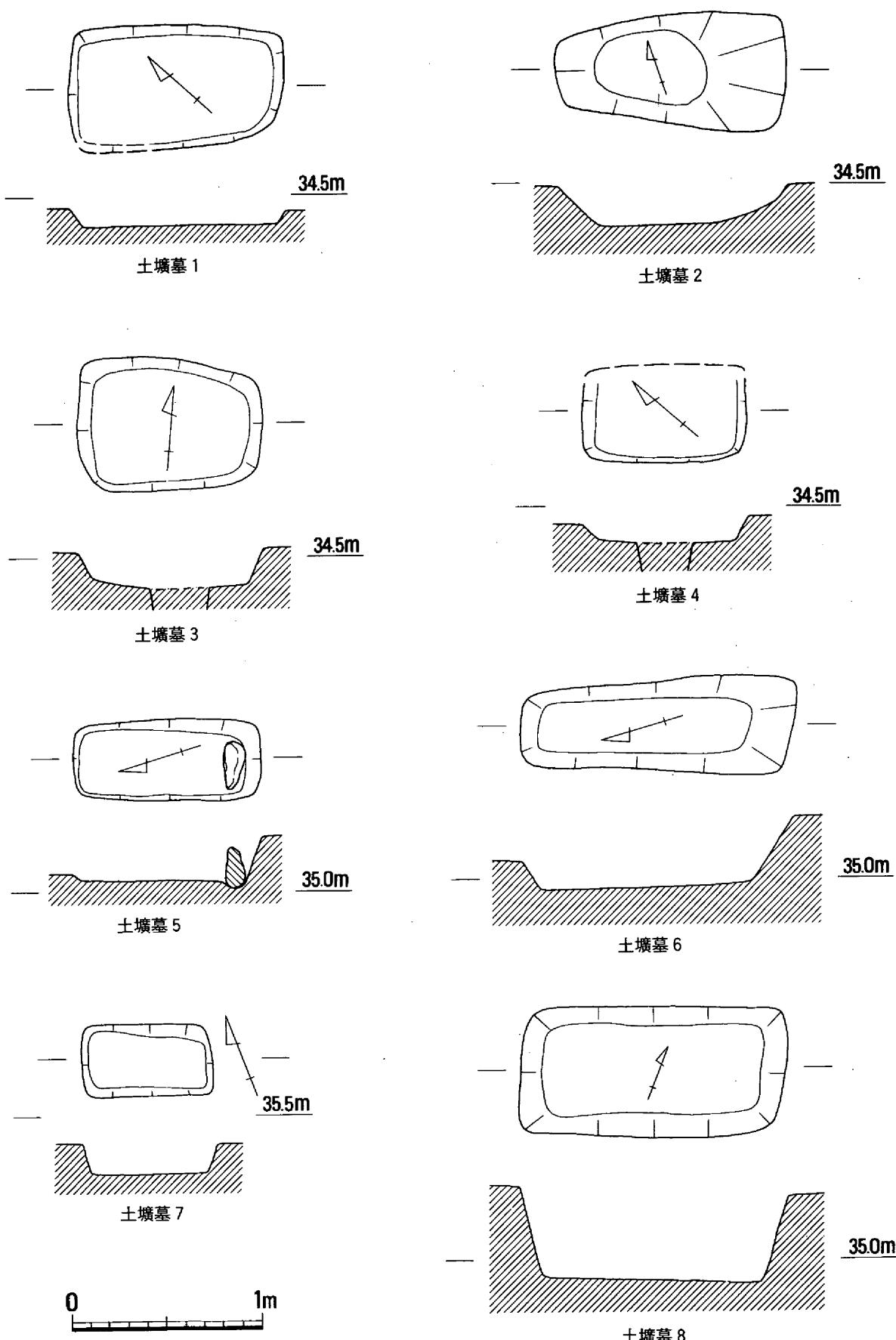
**土壙墓4** 底部で長辺75cmを測り、一部が調査区外にかかっているため短辺の規模は不明である。掘り方の平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。深さは15cm程度が残存していた。主軸の方位はN139°Eであり、掘り方内から遺物は出土していない。

**土壙墓5** 底部で長辺89cm、短辺33cmを測る隅丸方形の掘り方をもち、深さは南側小口部分で約25cmが残存していた。南側の小口部分は、底面を若干掘りくぼめて花崗岩の石材が据えられている。内側に平坦な面を向けて立てられており、木棺を伴っていたかどうかは不明であるが、小口板と関連する石材ではないかと思われる。なお、相対する北側小口部分にはこのような石材はみられず、石材を据えるための掘り込みの痕跡も確認されなかった。主軸の方位はN18°Eである。掘り方内から弥生土器の小片が出土しているが、ごくわずかな部分の破片であり、図示していない。

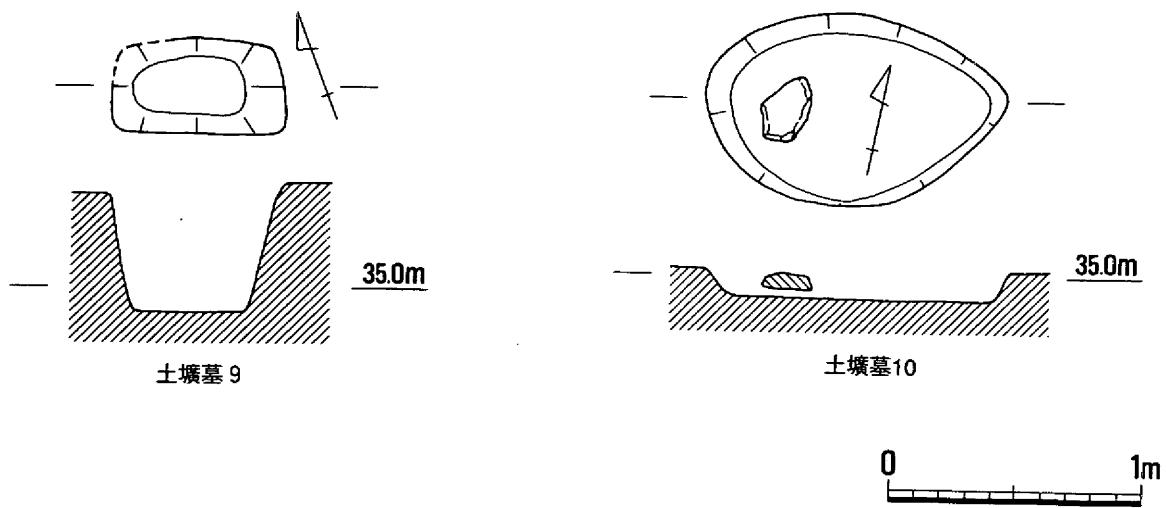
**土壙墓6** 土壙墓5と平行に並んで検出されたもので、検出面で長辺144cm、短辺51cmを測り、底部で長辺111cm、短辺30cmを測る。平面形は隅丸方形で、南側の方が北側よりもやや幅広い。深さは南側小口部分で約35cmが残存していた。主軸の方位はN17°Eであり、掘り方内からは、図示していないが、弥生土器の小片が出土している。

**土壙墓7** 底部で長辺63cm、短辺30cmを測る、小規模な隅丸方形の掘り方をもつ。深さは約15cmが残存しており、主軸の方位はN111°Eである。掘り方内から遺物は出土していない。

**土壙墓8** 本遺跡における土壙墓群の中で最も大形の掘り方をもつ土壙墓である。検出面で長辺138cm、短辺69cm、底部で長辺114cm、短辺48cmを測る。深さも他の土壙墓に比べてかなり深く、深いところで約50cmが残存していた。主軸の方位はN70°Eである。掘り方内から比較的多くの弥生土器片が出土しており、完形に復元できるものはないが、副葬品あるいは供献品であった可能性が考えられる。出土状況は、掘り方内の床面からは10cm以上浮いたレベルで出土しているものが多い。



第12図 土壙墓 1 ~ 8 S=1/30



第13図 土壙墓 9・10 S=1/30

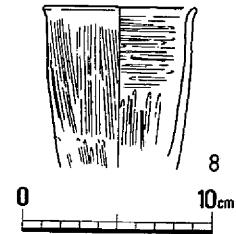
第14図に示したものはその内の1点で、玉葱形の扁平な胴部をもつと推定される直口壺の口縁部である。これらの出土土器から、土壙墓8の時期は弥生時代後期末頃と推定される。

**土壙墓9** 検出面で長辺69cm、短辺38cm、底部で長辺45cm、短辺24cmを測る小規模な隅丸方形の掘り方をもつ。平面形での規模に比べて深さは深く、約50cmが残存していた。主軸の方位はN110°Eである。掘り方内からは、図示していないが、弥生土器の小片が出土している。

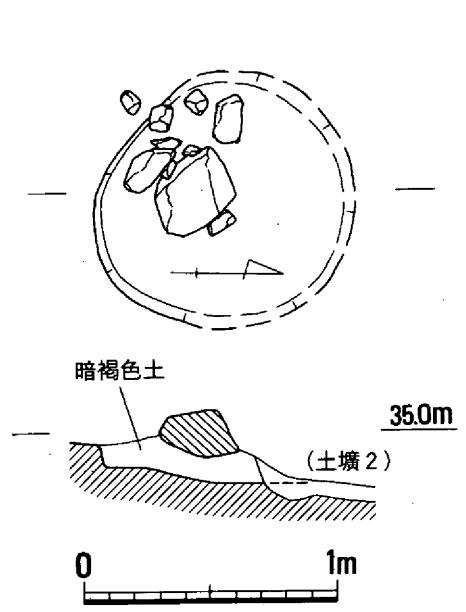
**土壙墓10** 底部で長辺105cm、短辺66cmを測る不整楕円形の掘り方をもつ。掘り方内の西側に平たい花崗岩の石材が存在し、枕石と考えられる。深さは約10cmが残存しているにすぎない。主軸の方位はN79°Eであり、掘り方内からは、図示していないが、弥生土器の小片が出土している。

**土壙墓における埋葬頭位** 以上のように、土壙墓と考えられる土壙が計10基検出されているが、埋葬の状況については不明のものがほとんどである。その中で、土壙墓5・6・10については頭位方向の推定が可能であると思われる。土壙墓5については、小口板と関連するとみられる石材が存在するが、片側の小口部にしかないから、頭のくる方向をより入念につくったとみることができるならば、石材の存在する南側に頭を向けたものと推定できる。土壙墓6については、掘り方の南側の方が幅広く、さらに床面のレベルが南側の方が高くなっていることから、南側に頭を向けて埋葬を行なったものと考えられる。土壙墓5と6は2基が平行して並んで築かれており、いずれも南に頭を向けたものと考えられるから、矛盾がない。これは、当地点において南の方が地形が高くなっていることと関連すると思われる。土壙墓10については枕石と思われる石材が存在することから、西に頭を向けていたと考えられる。

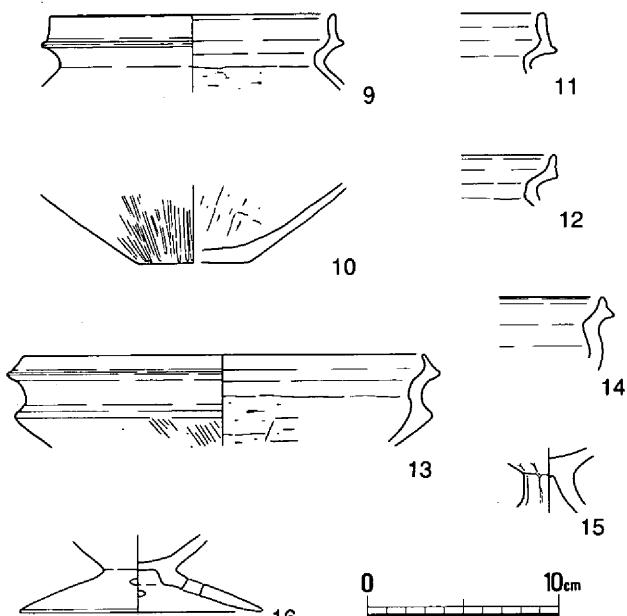
**土壙1（第15図）** 調査区北西部の竪穴住居1の脇から検出された。土壙の北半部を中世の土壙（土壙2）によって切られているため平面形は不明であるが、概ね円形を呈するものと推定される。深さは10cm程度が残存していたが、埋土内には多数の弥生土器片が含まれていた。また検出面付近のレベルにおいて、土壙の南西部分を中心に拳大ないし人頭大の角礫が集積されていた。この土壙の性格については不明である。出土土器（第16図）には甕（9～12）や高杯（13～16）があるが、個体数が多い割にあまり大きな破片ではなく、この土壙内に完形の土器がおさめられていたとは考えにくい。



第14図 土壙墓 8  
出土遺物 S=1/4



第15図 土壌1 S=1/30

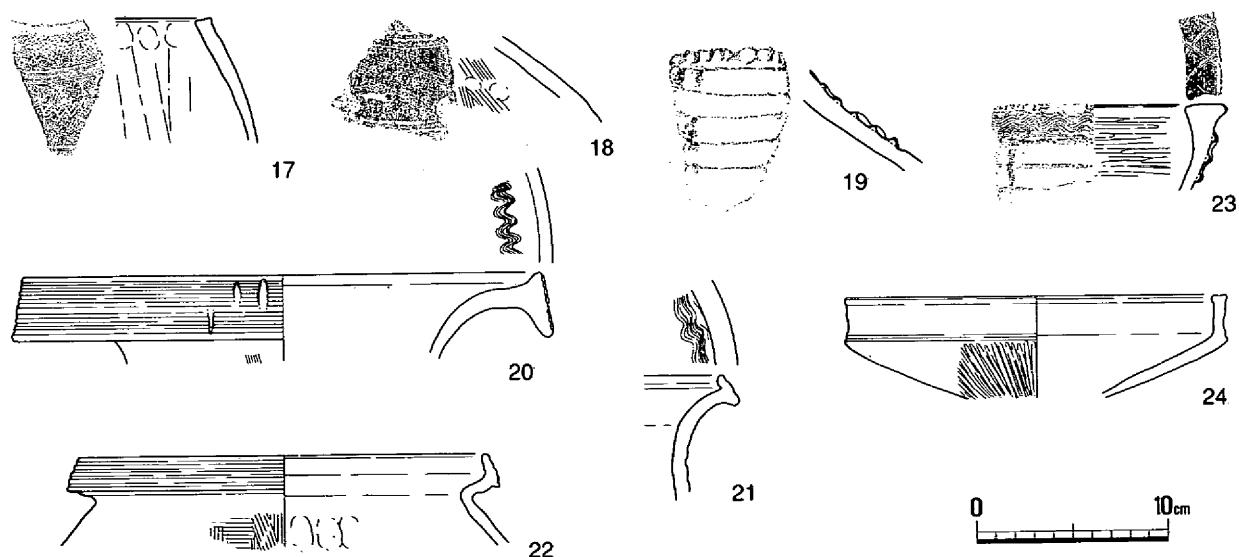


第16図 土壌1 出土遺物 S=1/4

これらの土器から、土壌1は弥生時代後期末頃に埋められたと考えられる。

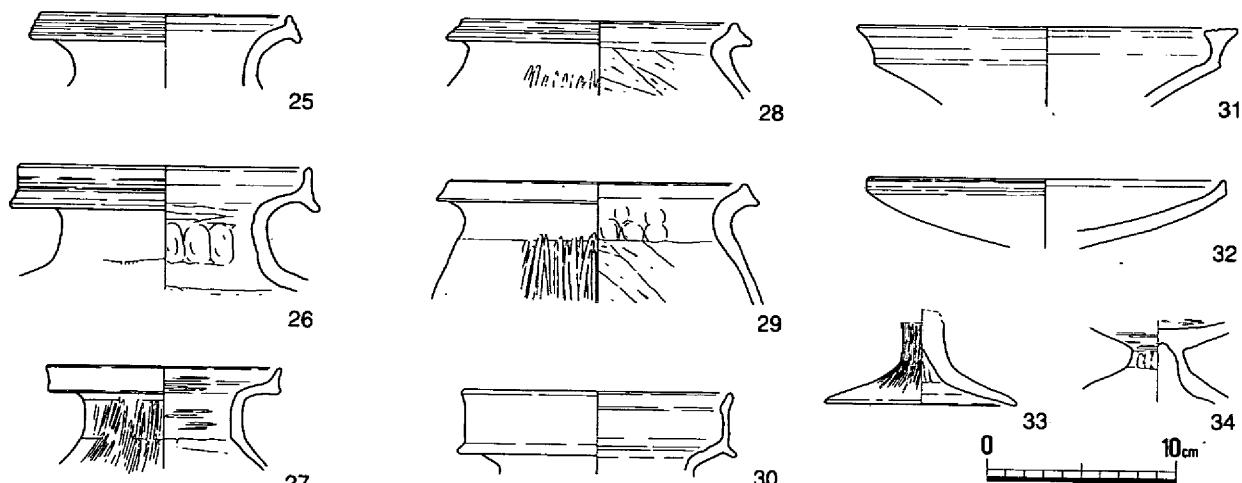
**包含層出土の弥生土器（第17図、第18図）** 第17図に示したものは、弥生時代中期の土器である。17～21は壺、22は甕、23・24は高杯である。17は櫛描文、18は押し引き状の沈線文を外面にもつ。19・23は断面三角形の張り付け突帯を数条めぐらし、棒状浮文を付す。17～19・23が中期前半、20～22・24が中期後半のものと考えられる。第18図に示したものは、弥生時代後期の土器である。25～27は壺、28～30は甕、31～34は高杯である。25・28・31が後期前半、その他が後期後半のものと思われる。なお、本遺跡出土の弥生時代後期の土器には、丹塗りを施しているもの非常に多い。

**包含層出土の石器（第19図）** 35は安山岩製の大型蛤刃石斧で、基部を欠損している。全体的に敲打痕が認められる。刃端部は磨耗が著しく、縦方向の擦痕が認められる。36は結晶片岩製の石斧で、概ね三角形の平面形を呈する。刃部は片刃であり「横斧」と考えられる。中央付近の両脇に浅いえぐりが認められ、着柄に関連する加工とみられる。37はサヌカイト製のスクレイパーで、両側縁の両面

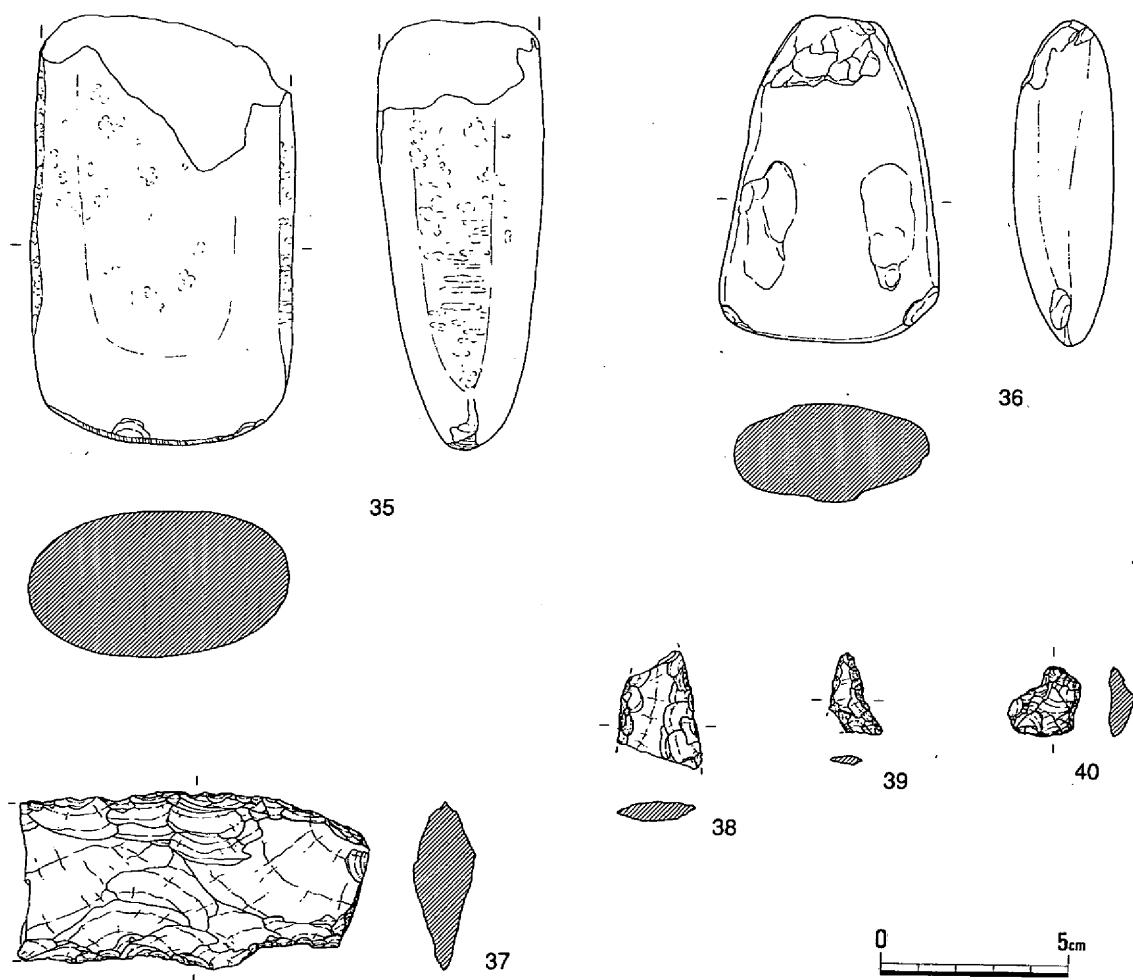


第17図 包含層出土の弥生土器(1) S=1/4

### 第3章 発掘調査の概要



第18図 包含層出土の弥生土器(2) S=1/4



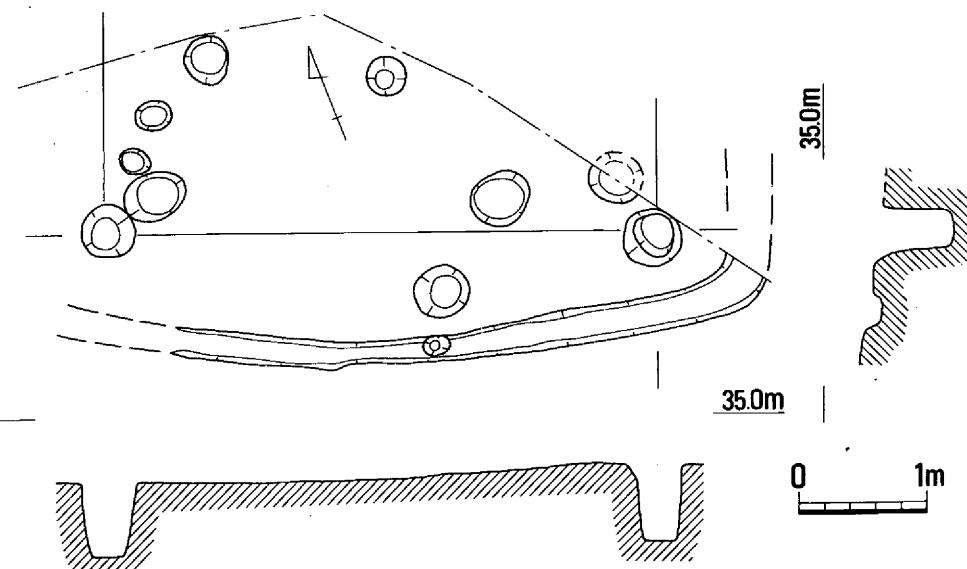
第19図 包含層出土の石器 S=1/2

に加工が施されている。右側の端部は自然面で、左側は欠損している。38・39はサヌカイト製の石鎌である。40はチャート製の石器である。楔形石器の可能性もあるが、中世の火打石の可能性が高い。図示したものの他に、サヌカイトの剥片やそれに二次調整を施したもののが数点出土している。これらの石器は、40以外はほぼ弥生時代に属するものと思われる。

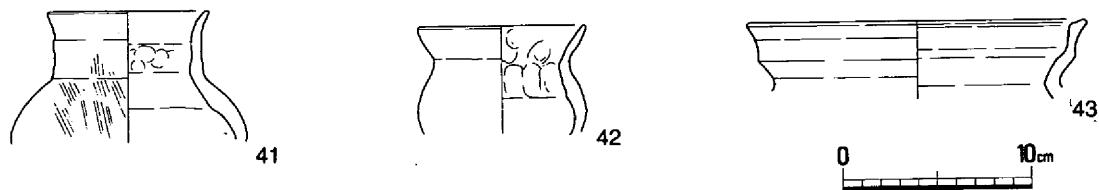
## 第4節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構としては、竪穴住居1軒（竪穴住居2）と土師器を埋納したピット1基（ピットa）および柱穴がある。ただし弥生時代の項でも述べたとおり、柱穴についてはどれが古墳時代に属するものかを特定することは困難である。

**竪穴住居2（第20図）** 調査区の北東隅から検出された平面方形の竪穴住居であるが、壁体溝の一部と柱穴が残存しているにすぎない。ほぼ直線的にのびる壁体溝は、調査区北東壁にぶつかるあたりで屈曲しており、この付近がコーナーになるものと思われる。また住居南辺中央付近には壁体溝の中に小ピットが存在する。柱穴については、住居内に多くの柱穴が検出されているため、どの柱穴がこの住居に伴うものか明らかでないが、壁体溝との位置関係や、深さ、大きさから対になると思われるものを推定して図示している。なお壁体溝の中から土師器片が数点出土しており（第21図）、これらの資料から竪穴住居2は、古墳時代前期に位置付けられる。

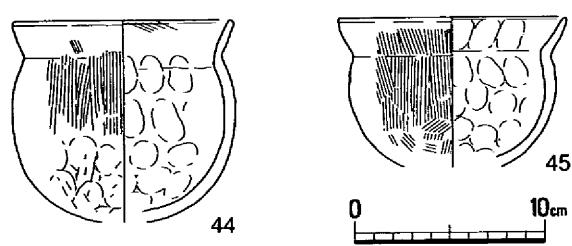


第20図 竪穴住居2 S=1/60

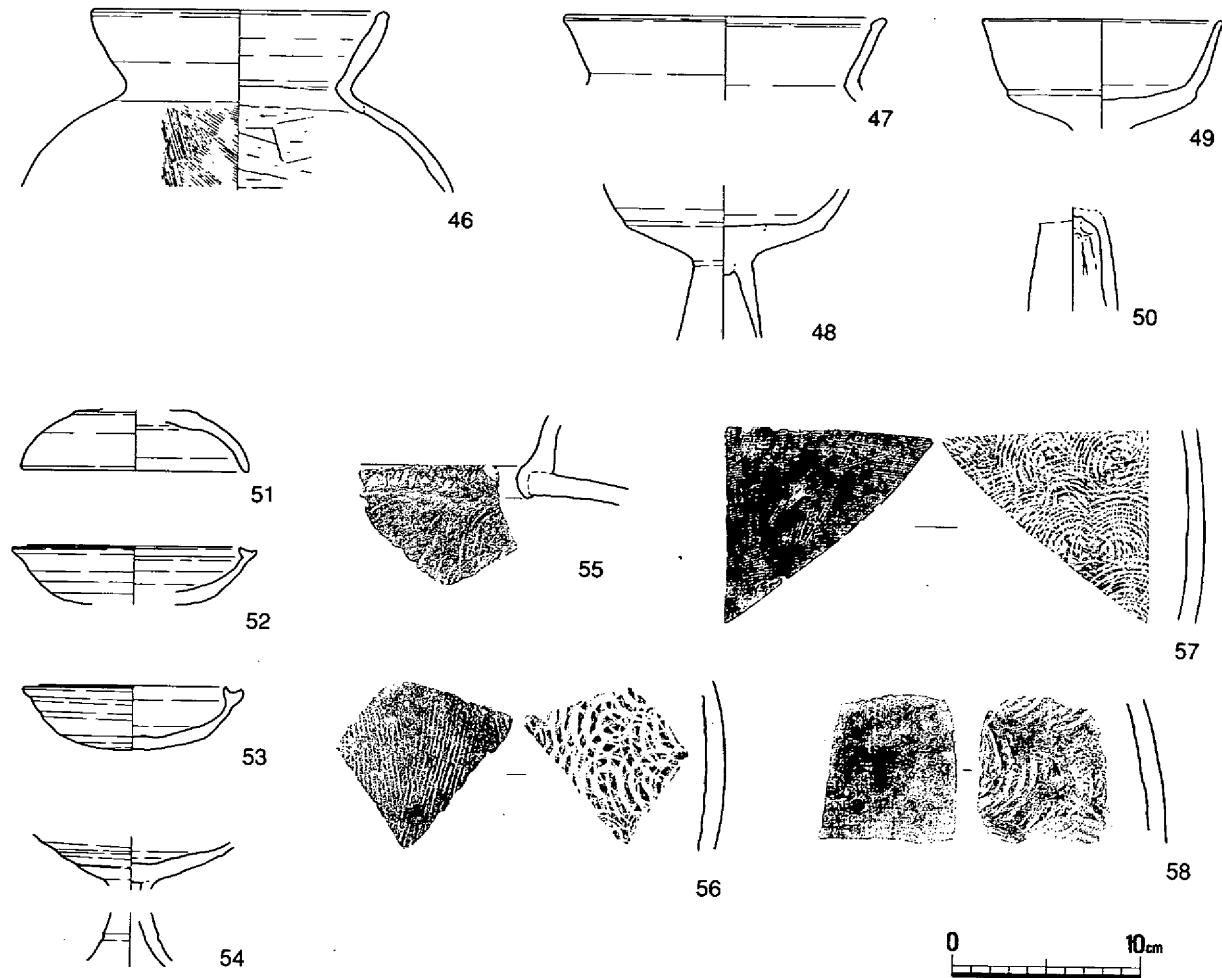


第21図 竪穴住居2出土遺物 S=1/4

**ピットa（第7図）** 調査区南半部中央付近のピットaの中から、土師器片数点が出土している。小形の鉢2個体（第22図）と椀の破片があり、古墳時代初頭頃のものと思われる。なお、このピットの周辺に他のピットは認められず、削平されてしまっている可能性もあるが、建物を構成する柱穴とは考えにくい。



第22図 ピットa出土遺物 S=1/4

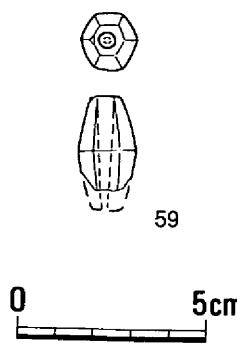


第23図 包含層出土の古墳時代の土器 S=1/4

包含層出土の古墳時代の遺物（第23図、第24図） 46～50は土師器、51～58は須恵器である。46・47はくの字形の口縁をもつ甕で、口縁端部には内傾する面をもつ。48～50は高杯で、杯部は直線的に外方へ開き、脚柱部は中空形態をとる。以上の土師器は、古墳時代前期に属し、竪穴住居2と概ね一致する時期のものである。

一方、須恵器はいずれも7世紀代の特徴を示している。杯（51～53）の径は小さく、12cm前後である。杯身の立ち上がりも低い。高杯（54）は短脚化が進み、脚部に透かしをもたない型式のものである。蓋杯、高杯とともに7世紀中葉頃の年代が与えられる。55～58は甕の破片であるが、57は内部の当て具痕に車輪文が認められる。また、59は水晶製の切子玉であり、一端を欠損している。これらの須恵器および切子玉は、いずれも調査区の北東部分に集中して出土しており、本来一括して、この部分に存在した7世紀代の遺構に伴っていたものと思われる。その遺構は削平によって消滅していると考えられるが、終末期の古墳が存在したのかもしれない。

そのほかに、土師器の鍋あるいは甕の一部とみられる舌形の把手が出土している。古墳時代後期、あるいは奈良時代のものと考えられる。また古墳時代ではないが、奈良時代の須恵器の杯身の小片も出土している。古代に属する遺物はこれ以外に出土していない。



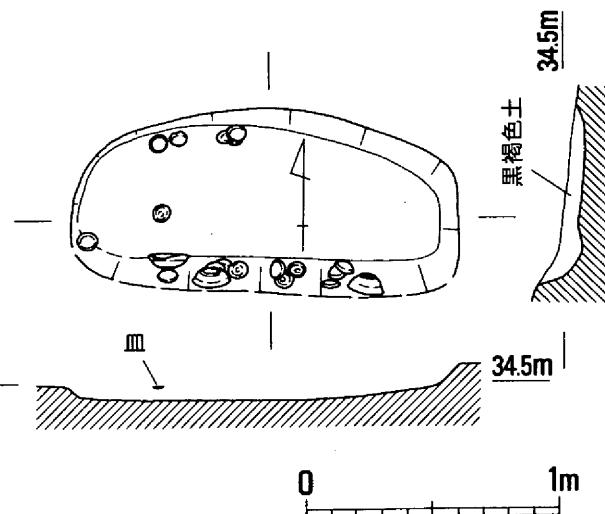
第24図 包含層出土  
切子玉 S=1/2

## 第5節 中世の遺構と遺物

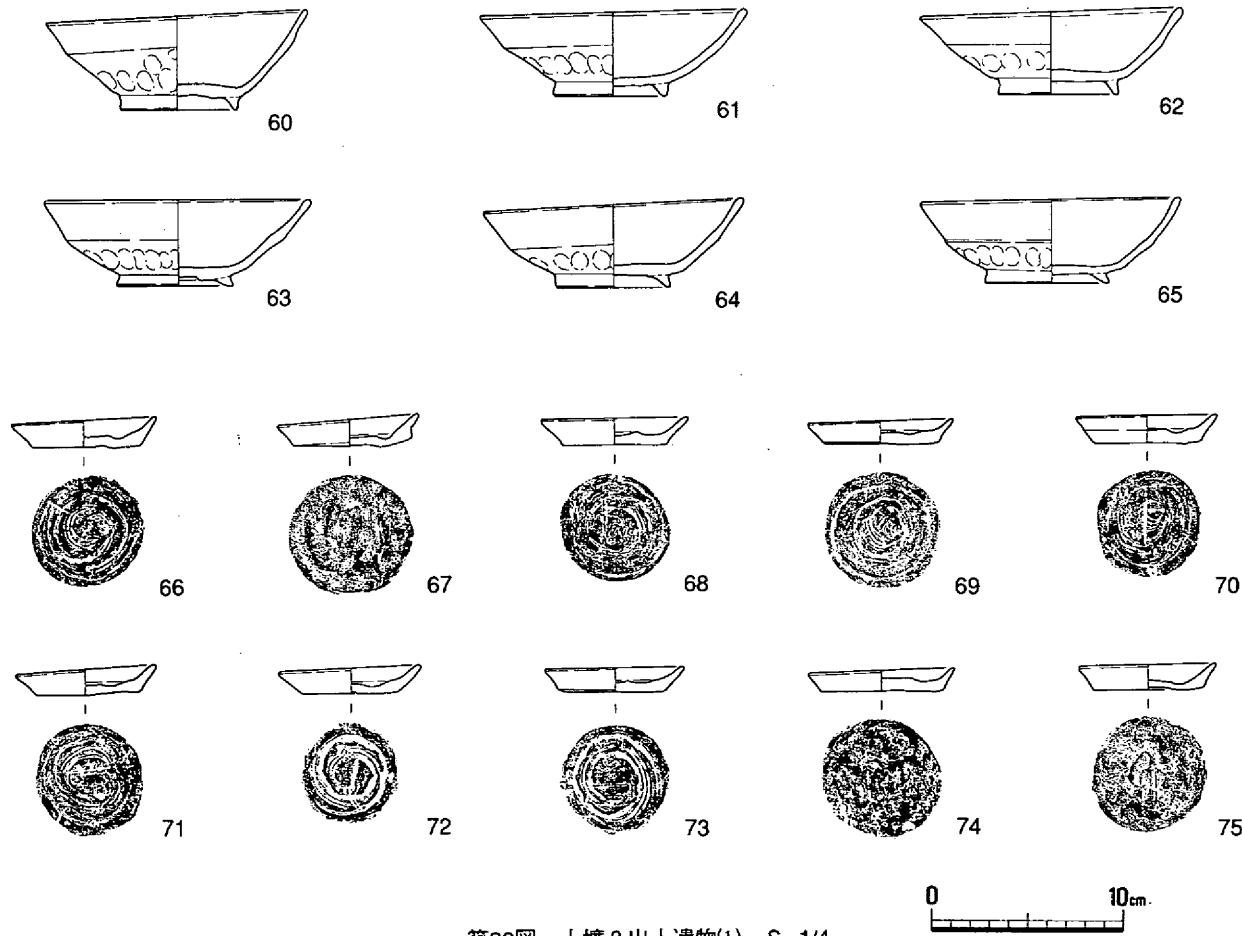
中世の遺構と明確に時期を特定できる遺構は、土壙1基のみであるが、多数存在する柱穴の中には、埋土中に須恵器片を含むものもあり、中世に属する柱穴も存在すると思われる。ただし、建物としてまとめられる柱穴群は認められない。

**土壙2（第25図）** ややくずれた隅丸方形を呈する土壙である。底部で長辺143cm、短辺51cmを測る。主軸はほぼ東西の方位を示しており、磁北に対してN $89^{\circ}$  Eである。

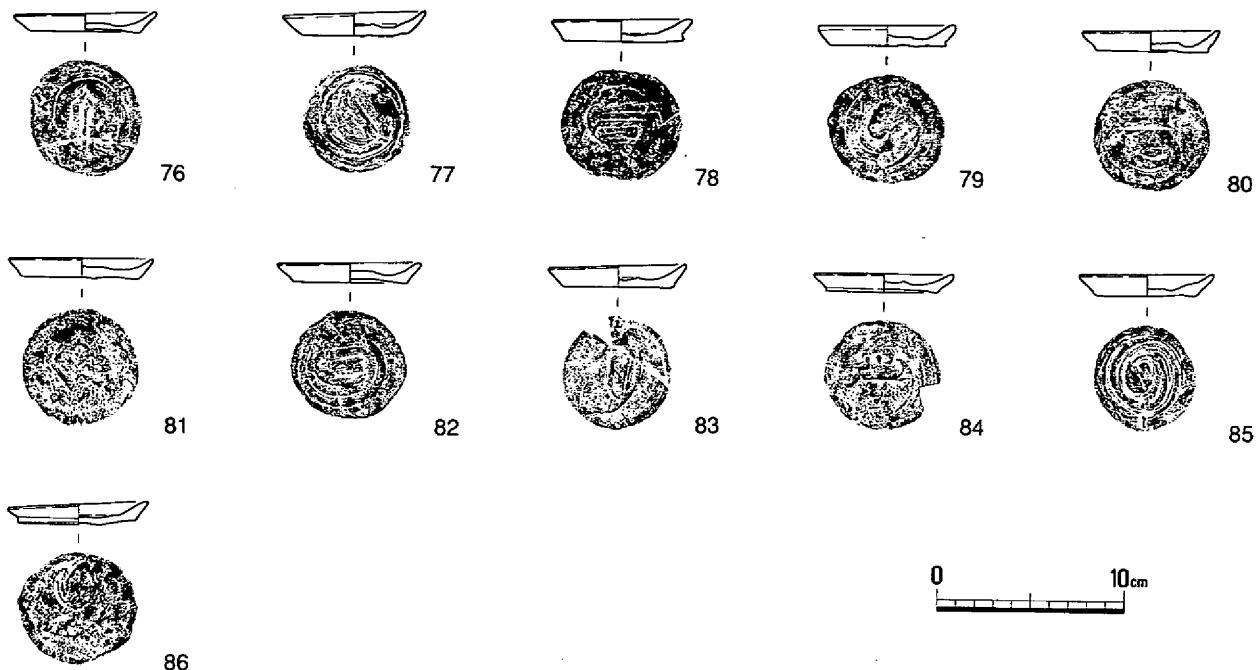
土壙の内部からは、多数の土師器が出土している。ほぼ掘り方に沿う形で出土しており、皿は数枚を重ねておさめられているものも多い。土器はいずれも土壙の床面から5cm以上浮いた状況である。出土土器には碗6個体、皿21個体がある（第26図、第27図）。いわゆる「早島式」のもので、碗、皿ともに同様の胎土、色調、焼成を示している。これらの土器から、土壙2の年代は13世紀初め頃に位置付けられる。土壙の性格については不明であるが、墓の可能性も考えられる。



第25図 土壙2 S=1/30

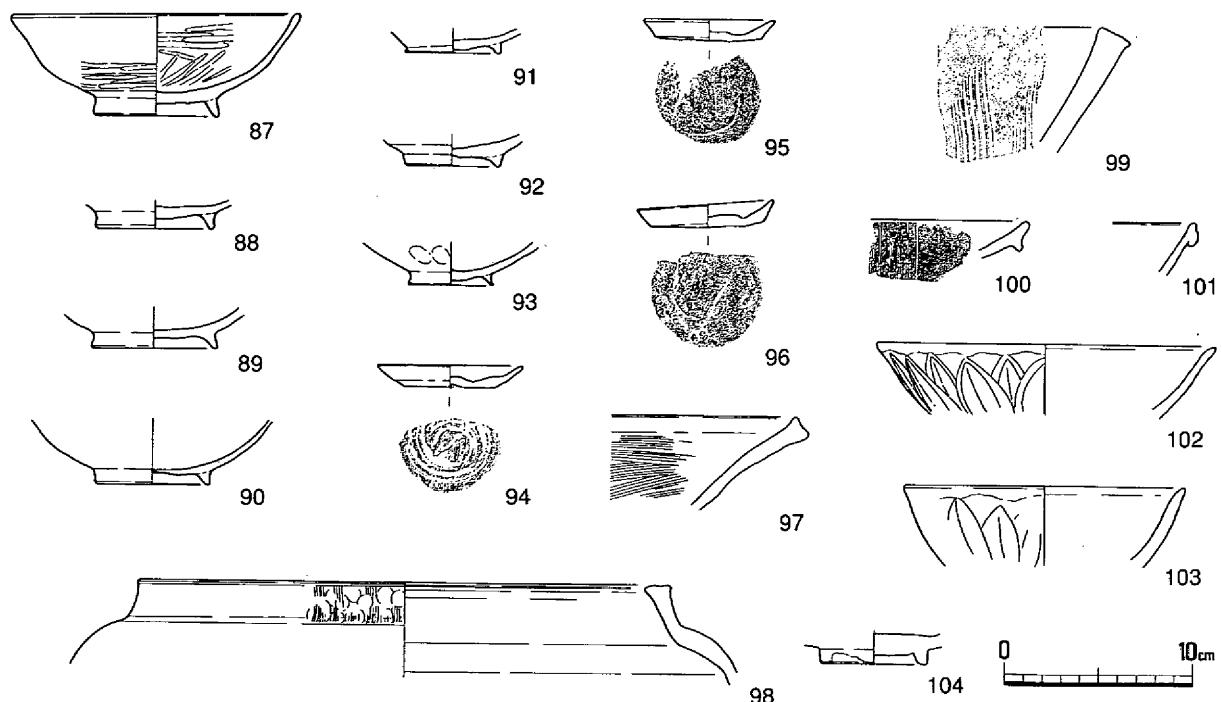


第26図 土壙2出土遺物(1) S=1/4



第27図 土壌2出土遺物(2) S=1/4

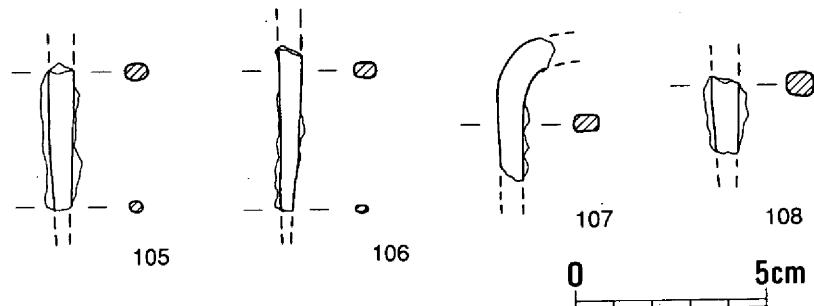
包含層出土の中世の遺物（第28図） 87～93は、いわゆる「早島式」の碗である。87は口径・器高ともに大きく、内外面にヘラミガキを施しているもので、土壌2の資料よりも古い様相を示している。12世紀中頃から後半頃のものと考えられる。88～90はおおむね土壌2の資料と同様の型式を示すものであり、91～93は若干新しく13世紀後半から14世紀前葉頃のものであろう。94～96は、いわゆる「早島式」の皿である。97・98は瓦質土器で、97は鍋あるいは焙烙の口縁部、98は羽釜であり、いずれも室町期のものである。99は13世紀の備前焼の摺鉢、100は龜山焼の摺鉢である。101は白磁の碗、102～104は青磁の碗で、いずれも13世紀代の年代が与えられる。



第28図 包含層出土の中世の遺物 S=1/4

## 包含層出土の鉄器（第29図）

包含層中より、鉄釘片が数点出土している。いずれも小形の釘であるが、頭部の残存しているものもなく、時期を決定することができない。7世紀代のものか、中世のものの可能性が高い。

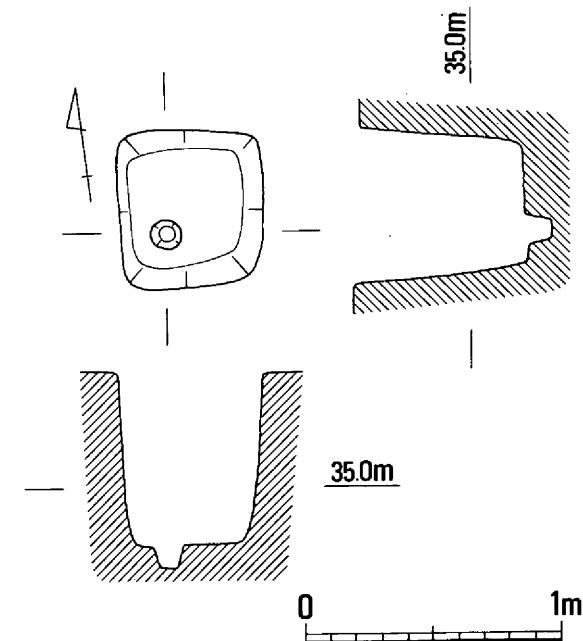


第29図 包含層出土の鉄器 S=1/2

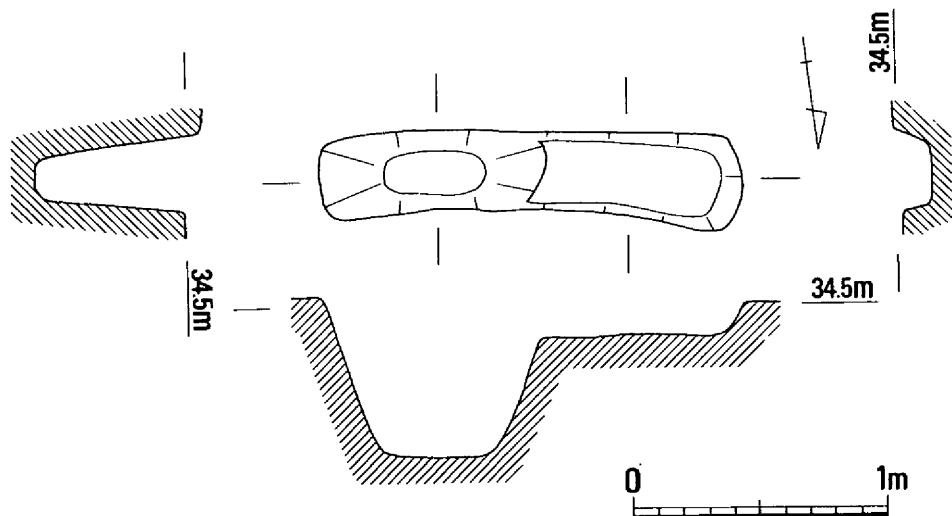
時期を特定できない遺構 以上に述べてきた弥生時代から中世の遺構と同一の面で検出され、埋土の状況も同様であることから、中世以前の遺構と推定できるものの、それ以上の時期の特定ができない遺構がある。土壙3および土壙4である。

**土壙3（第30図）** 方形プランの土壙で、平面の大きさに比べて深い。検出面での規模は、南北63cm、東西57cm、検出面からの深さは65cmを測る。また底面には径約12cm、深さ約10cmの小ピットが存在する。その形態から縄文時代の落し穴の可能性も考えられる。埋土は弥生時代の遺構と変わらない。

**土壙4（第31図）** 非常に細長い長方形の平面形を示す土壙で、西半部は浅く、東半部が深くなっている。検出面における規模は、長辺168cm、短辺30～39cm、残存する深さは西半部で約15cm、東半部で約65cmである。時期、性格ともに不明であるが、埋土中より須恵質土器の小片が出土しており、古代から中世の遺構ではないかと思われる。



第30図 土壙3 S=1/30



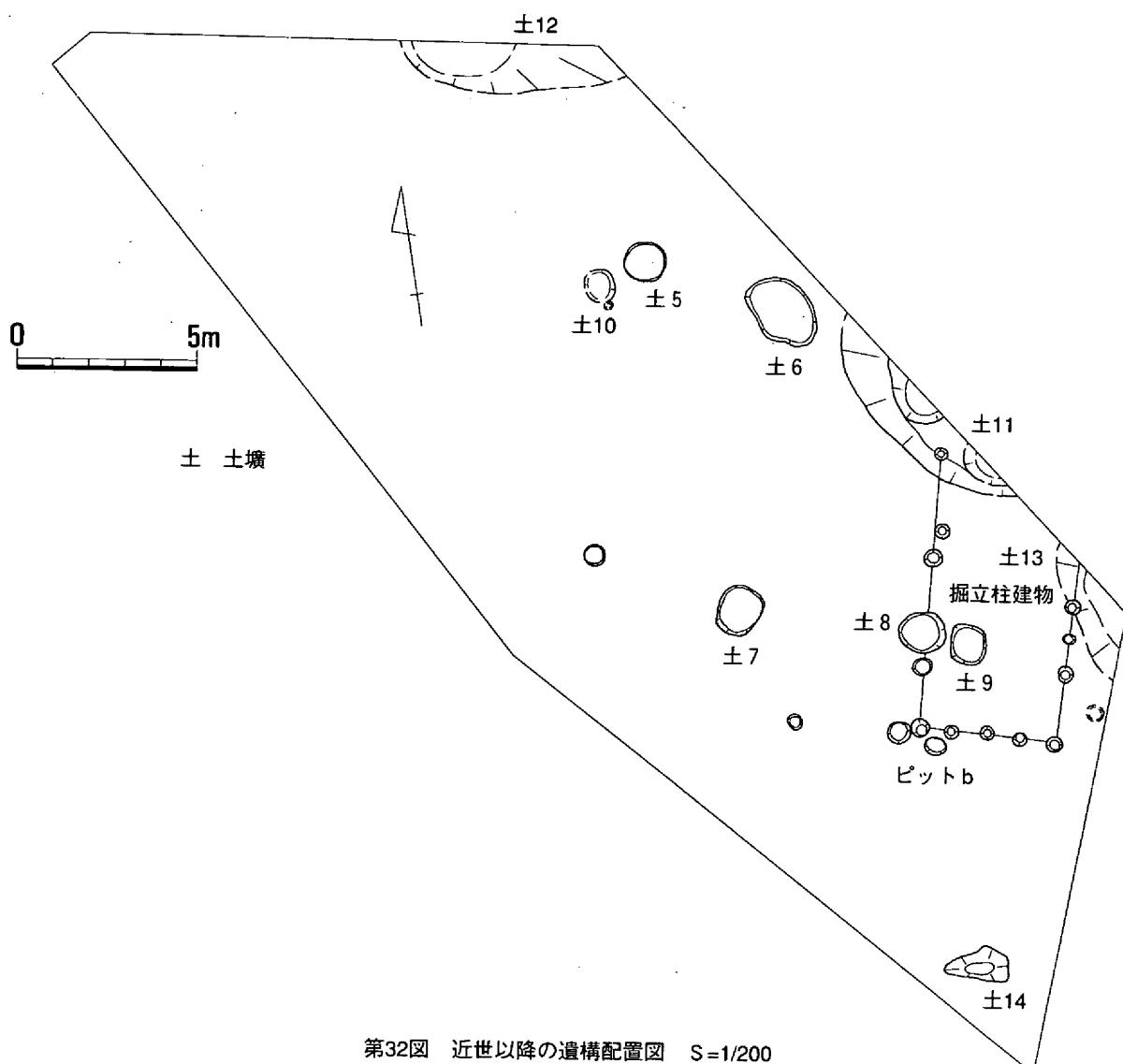
第31図 土壙4 S=1/30

## 第6節 近世以降の遺構と遺物

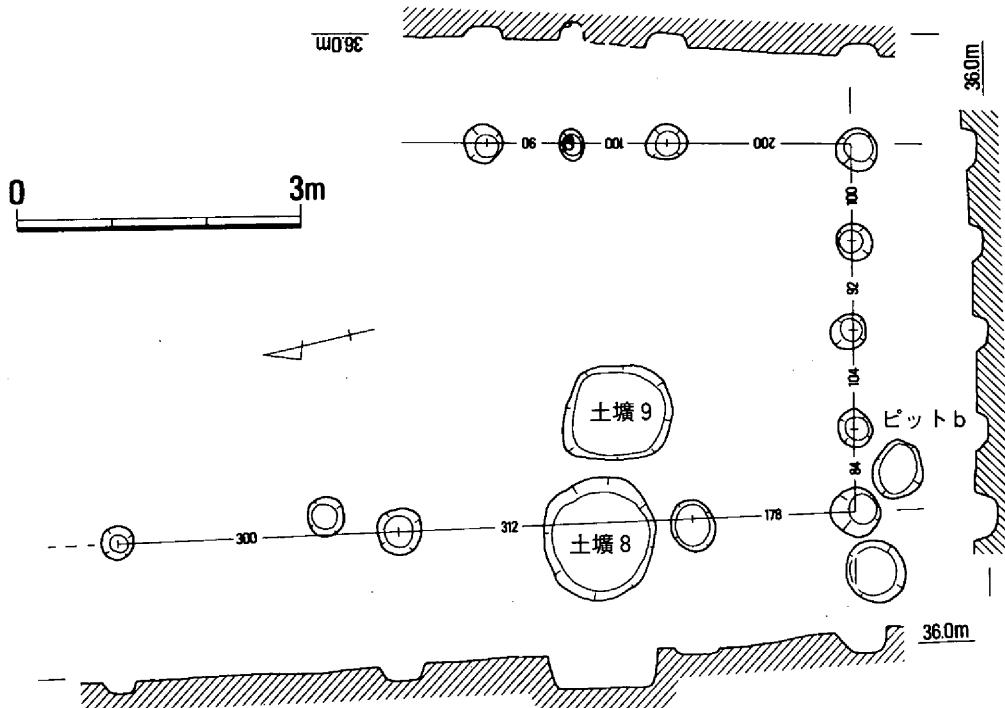
近世以降の遺構は、検出面や埋土の状況から中世以前のものとは区別できる。近世以降の遺構には、掘立柱建物1棟、土壙10基およびピット若干がある。

**掘立柱建物（第33図）** 調査区の東隅付近の表土直下で検出された。建物の方位はほぼ南北に長く、北側は調査区外にのびている。東西の規模は4間で3.8m、南北は7.9m以上であるが、柱穴の残存状況が悪く、南北列の間数については不明である。柱間距離は、ほぼ1m前後を単位としているようである。柱穴はいずれも平面円形で、残存する深さは平均して15cm前後である。したがって、元々浅かった柱穴については、削平されて消滅している可能性がある。柱穴の埋土は暗褐色砂質土の单層で、柱痕跡は全く確認されなかった。この掘立柱建物の付近には、後述する土壙8・9や、瓦多数を埋納していたピットbなどの遺構が存在しているが、建物との関係は不明である。

この掘立柱建物から年代のわかる遺物は出土していないが、西辺柱穴列の南から2番目の柱穴底部より、石硯が出土している（第34図-109）。幅4.0cmの方形を呈する小形のもので、周囲に縁がめぐる。表面の一部に、わずかながら墨の付着しているのが観察できる。海と陸の区別がみられないが、



第32図 近世以降の遺構配置図 S=1/200

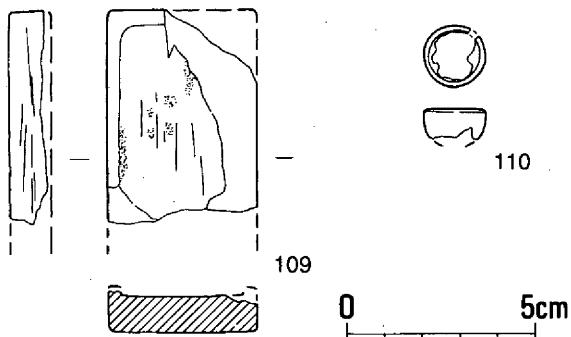


第33図 掘立柱建物 S=1/80

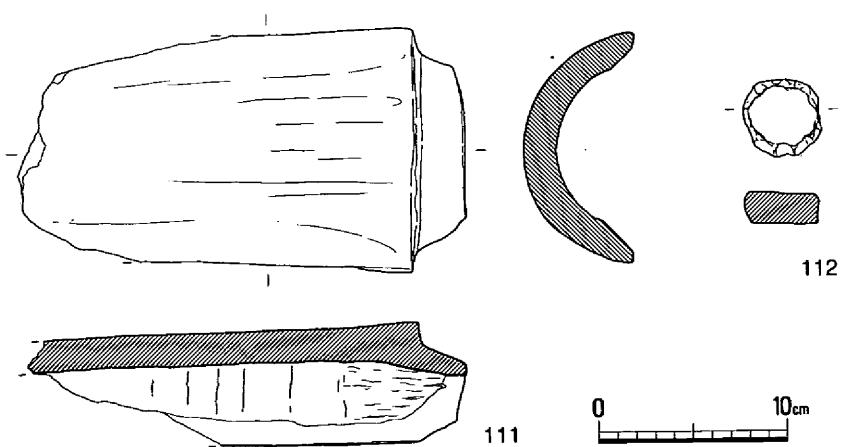
欠損部分に海が存在すると思われる。また、建物東辺付近の検出面直上より、煙管の破片が出土している（第34図-110）。銅製品であるが、雁首部のみの破片である。これらの出土遺物からこの建物の年代を決定するのは困難であるが、柱穴の一つが、後述する土壌11の埋められた後から掘り込まれており、それよりも新しい、近世末期から近代のものと思われる。

#### ピットb（第35図）

掘立柱建物南西隅の脇に検出された径約20cmのピットである。ピット内からは、丸瓦の破片8点と、瓦を打ち欠いて作られた円板状瓦製品が出土している（第35図）。瓦に瓦当部分は認められなかったが、いずれも後述する土壌11や表土層出土の資料と同様のものである。

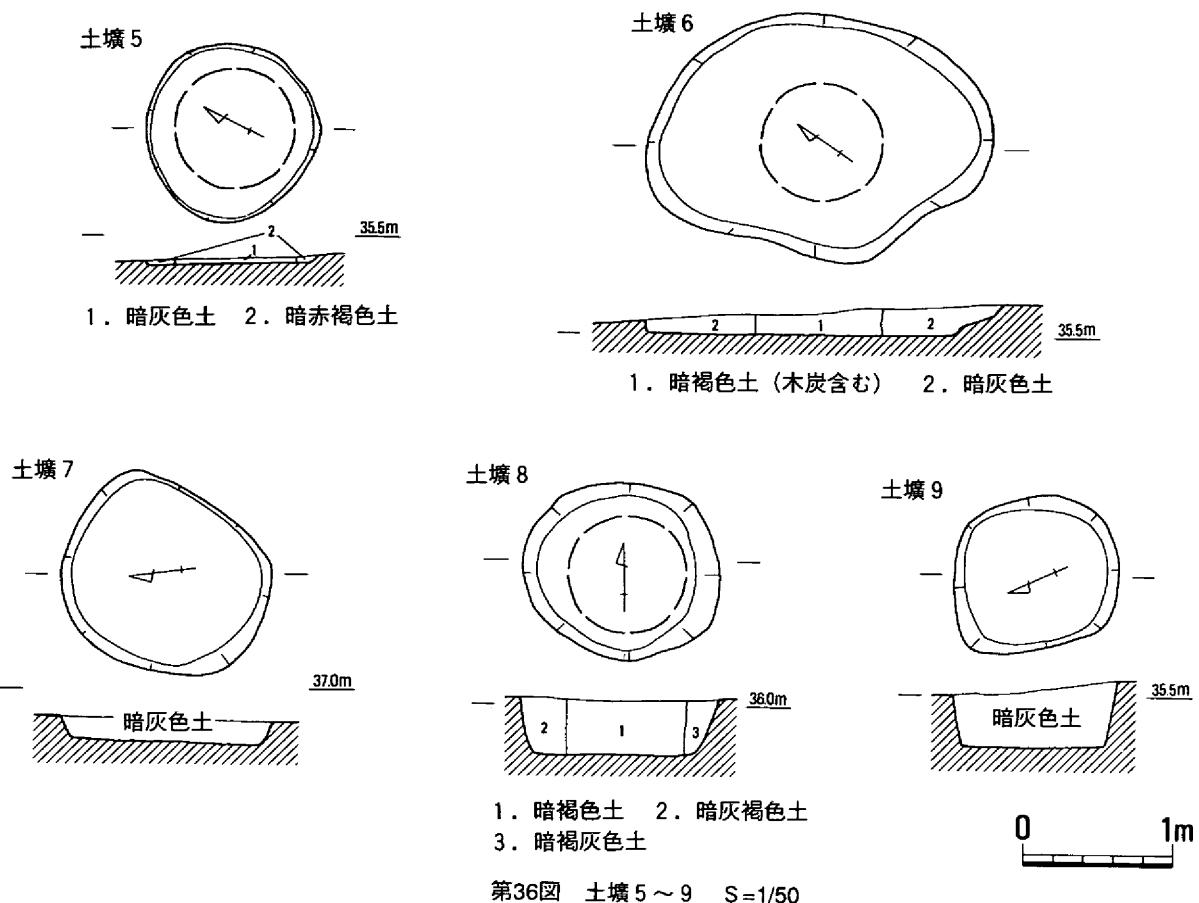


第34図 掘立柱建物出土遺物 S=1/2

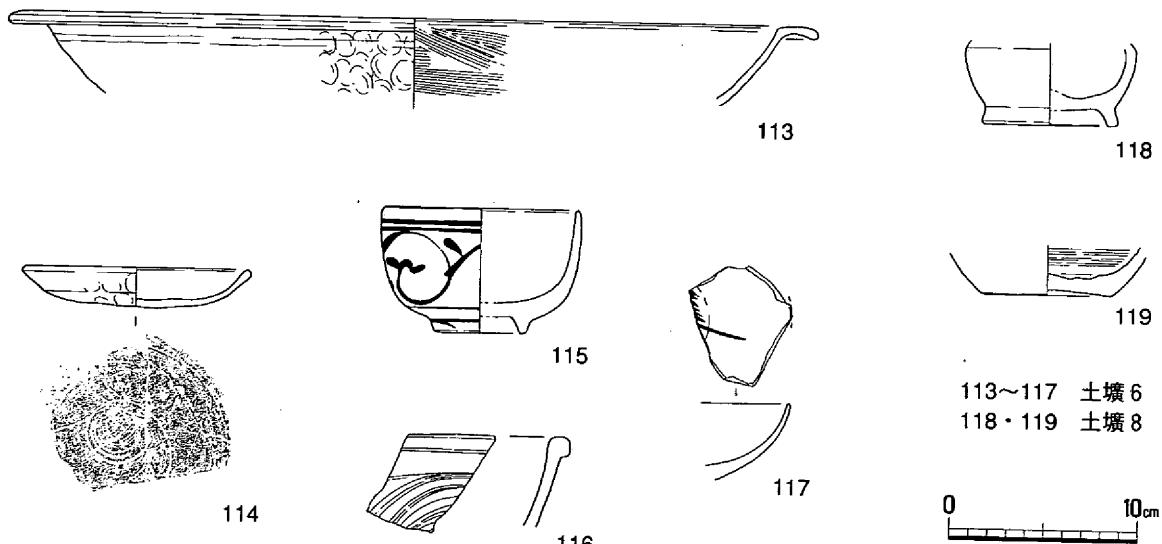


第35図 ピットb出土遺物 S=1/4

### 第3章 発掘調査の概要



第36図 土壌 5～9 S=1/50



第37図 土壌 6・8 出土遺物(1) S=1/4

**土壌 5～9 (第36図)** この5基の土壌は、埋土の状況や規模、構造等から、同様の性格をもつものと考えられる。径1m以上の、ほぼ円形の掘り方をもち、埋土は水分の影響を受けたためか、グライ化の傾向を示すものが多い。また土壌5・6・8では、掘り方内に径80cm前後の木桶の痕跡が土層観察から確認された。さらに土壌8においては、底部の木桶痕跡部分から、鉄釘が1本、横に寝た状態で出土しており（第38図-121）、桶の一部を釘で留めていたものと思われる。また土壌の内部に

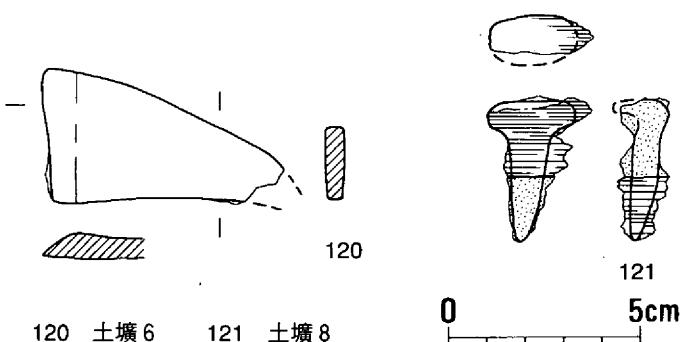
礫や瓦、陶磁器の破片を投げ込んでいるものがあり、土壌8では桶痕跡の内側に多数の礫や遺物が認められた。土壌の廃絶時にそれらを投げ込んだものと考えられる。これらの土壌の性格は不明であるが、水溜めあるいは野つぼに近い性格のものかもしれない。

鉄釘以外の出土遺物としては、土壌6・8より陶磁器類（第37図）、土壌6

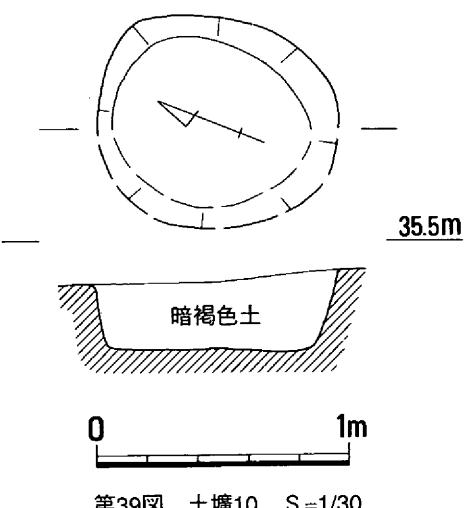
より用途不明の鉄器（第38図-120）が出土している。113は土師器の鍋、114は土師器の皿である。115～118は磁器で、115は染付の碗、116は刷毛目文の鉢、117は染付の皿、118は瓶である。119は備前焼の徳利と思われる。

**土壌10（第39図）** 径1m弱の浅い土壌である。埋土は単層で、出土遺物もなく、性格、時期ともに不明であるが、検出面から近世の遺構であると思われる。

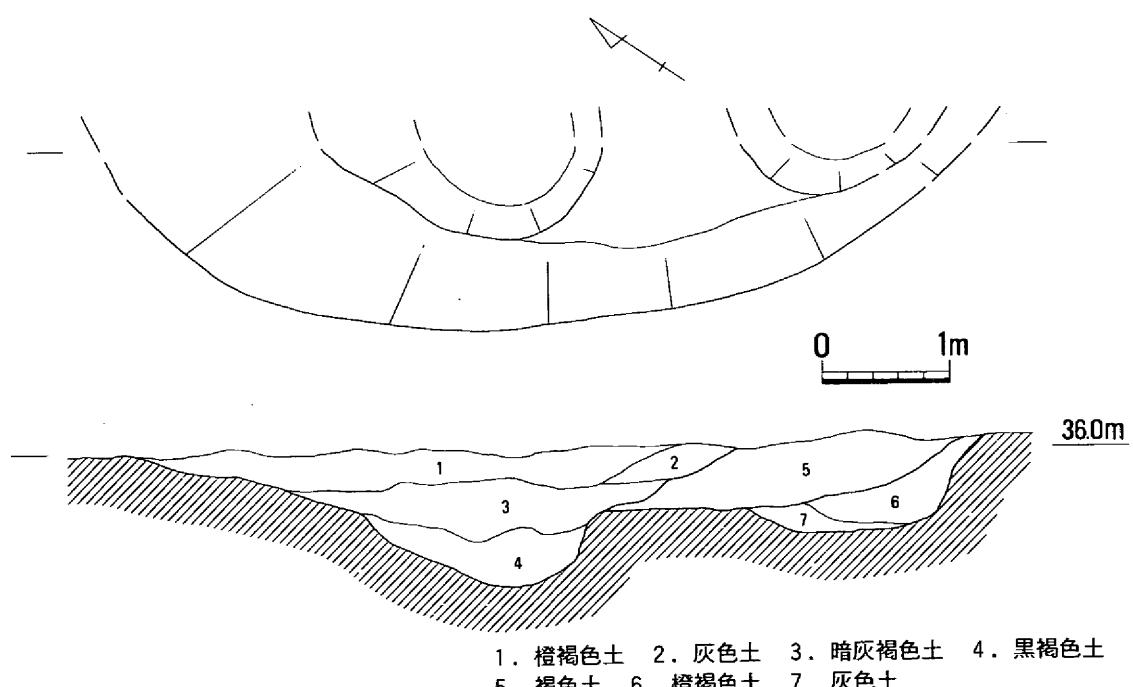
**土壌11（第40図）** 調査区北東辺にかかる状況で検出された不整形な土壌である。土層の観察から、数回にわたって掘り直された状況がうかがえる。6・7層からなるものが最も古く、その上から5層のものが掘られ、最後に1～4層のものが切っている。埋土は、特に上層において明るい色調を示し、礫を多く含むなど、自然堆積とは考えにく



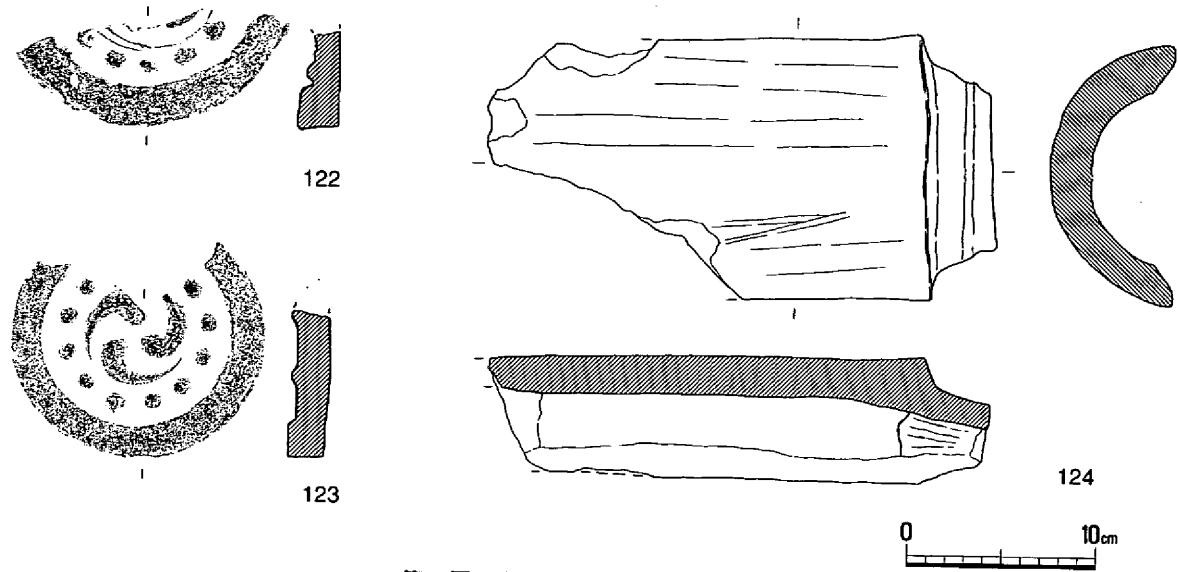
第38図 土壌6・8出土遺物(2) S=1/2



第39図 土壌10 S=1/30



第40図 土壌11 S=1/60



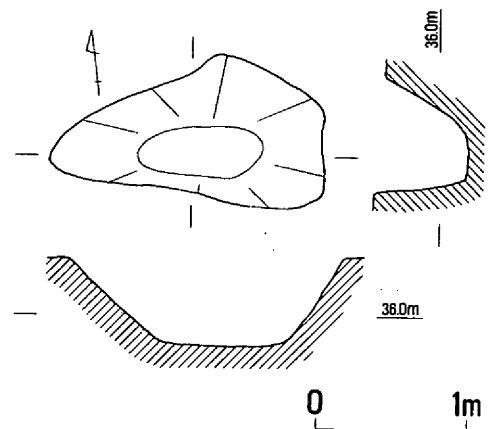
第41図 土壌11出土遺物 S=1/4

く人為的に埋められた状況を示している。遺物は多数出土しているが、瓦片が主で、その他の陶磁器類はいずれも小片である。瓦片は、4層の底部からの出土が最も多い、丸瓦、平瓦両方の破片多数があり、軒瓦も含まれている（第41図）。土壌の性格としては、ゴミ捨て穴が考えられる。

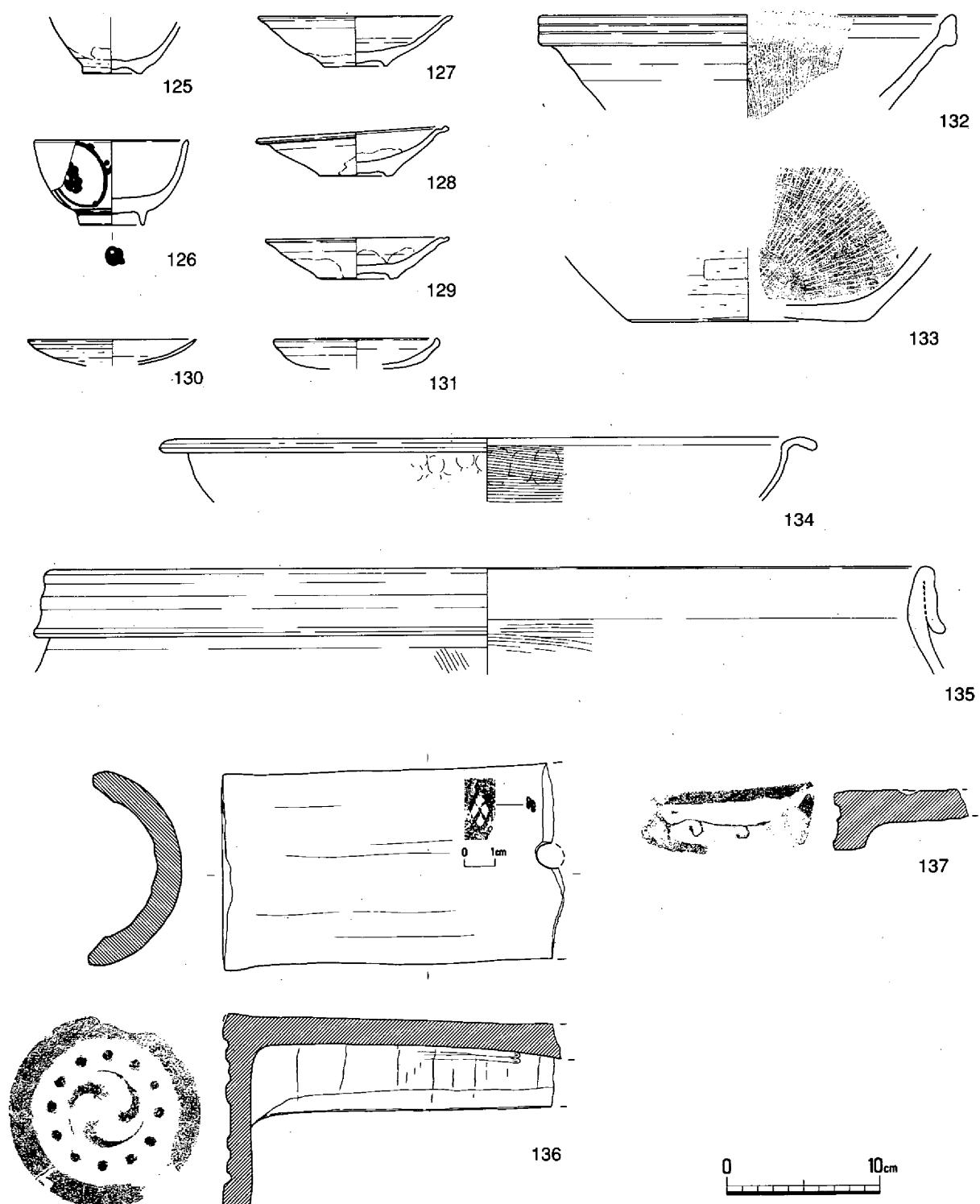
**土壌12・13（第32図）** 調査区の北東隅および南東隅で検出された土壌である。深さ30cm前後の浅いたわみ状を呈し、埋土の様子は土壌11と非常に類似している。土壌11と同様に、ゴミ捨て穴としての性格が考えられる。埋土には瓦、陶磁器類の破片が含まれているが、いずれも小片である。

**土壌14（第42図）** 調査区の南隅で検出された不整形な土壌である。長径150cm、短径95cm、深さ約55cmを測る。埋土は暗褐色粗砂の単層で、拳大の礫を多く含んでいる。遺物は出土しておらず、性格、時期ともに不明である。

**遺構に伴わない近世の遺物（第43図）** 調査区内の表土中より多くの近世の遺物が出土している。主として南半部分からの出土が多く、陶磁器類のほか、瓦が多数出土している。125・126は磁器の碗である。125はにぶい橙色の素地にオリーブ灰色の光沢のある釉が施されている。126は、高台接地面を除く全面に施釉され灰白色を呈し、外面および底面高台内に染付が施されている。127～129は磁器の皿である。127は褐色の素地に灰オリーブ色の光沢のある釉を施したもので、見込には胎土目がみられる。128・129の2個体は同様のもので、橙色の素地に灰白色の釉をかけているが、釉には光沢がなく、また器形の歪みが大きい。130は青灰色を呈する備前焼の皿、131は非常に細かい胎土をもちいた土師器の皿である。132・133は備前焼の摺鉢、134は土師器の鍋、135は甕である。136・137は瓦である。136は軒丸瓦で、瓦当は巴、表面の一部には菱形を四分割した刻印がある。家紋であろうか。内面には一面に縄目が認められ、その上から工具による筋状のナデ調整が行なわれている。また粘土



第42図 土壌14 S=1/50



第43図 遺構に伴わない近世の遺物 S=1/4

の接合痕が横方向に明確に認められる。137は軒平瓦で、瓦当は唐草文である。

以上の遺物の年代は、明確でないものもあるが、125～130が17世紀代を中心とする近世前半期、132・133が近世後半～末期と思われる。また、136・137の瓦については、瓦当の型式から、近世末頃のものと考えられる。

## 第4章 まとめ

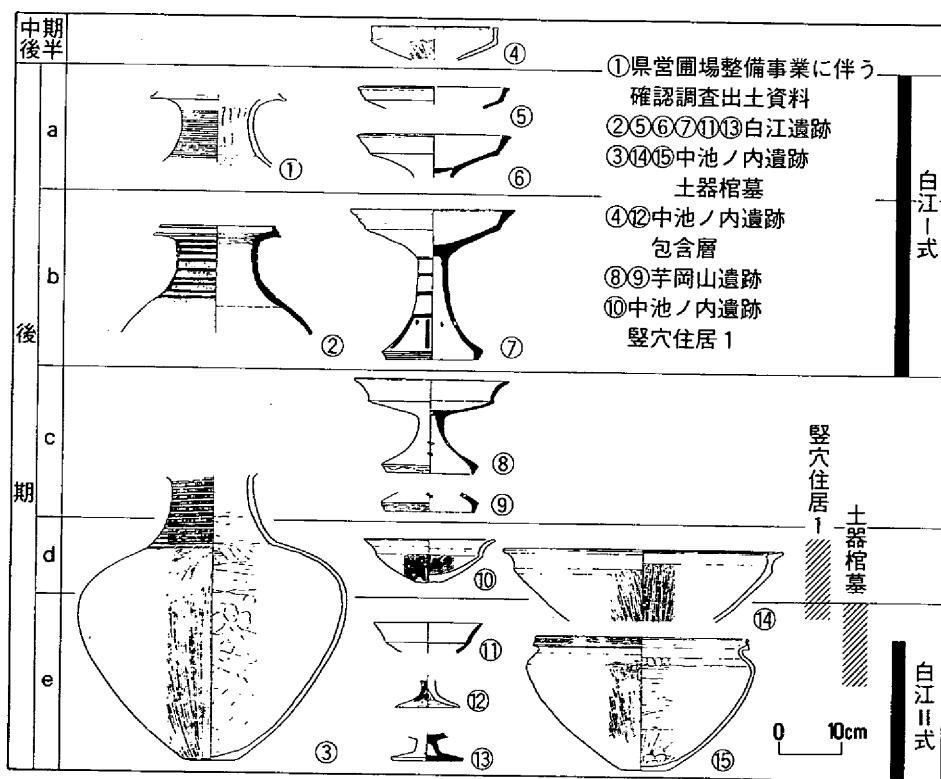
今回、非常に限られた面積ではあったが、中池ノ内遺跡の発掘調査を行なった。当初予想された以上の遺構・遺物が確認され、時期的にも弥生時代、古墳時代、中世、近世と幅広く、この地点が長い時代にわたって、居住地として、また墓地として利用されてきた様子がわかった。調査報告を終えるにあたって、弥生時代の遺構の時期を決定する手がかりとなる弥生土器と、弥生時代後期の土壙墓群、そして土壙2出土の中世土師器について簡単にまとめておく。

### 1 弥生土器と各遺構の時期

検出された弥生時代の遺構に伴う主な土器としては、土器棺に用いられた壺・鉢、竪穴住居1に伴った高杯、他に土壙墓群からの若干の小片と土壙1からの土器片がある。当遺跡の土地利用という点で、住居と墓地の前後関係が問題となるであろうから、竪穴住居1出土の土器と、墓地としての利用を代表する土器棺墓出土の土器について検討したい。これらの遺構の所属する弥生時代後期には、岡山県南部においても、土器様相に様々な地域性が展開しており一概には扱えない。そこで地域をかなり限定して、矢掛町中地区における弥生時代後期の土器を集め、その変遷をまとめてみた（第44図）。当地区では、白江遺跡<sup>(1)</sup>、芋岡山遺跡<sup>(2)</sup>などまとめた資料が知られている。なおここでは、中池ノ内遺跡の竪穴住居1および土器棺墓に伴った壺、高杯、鉢に器種を限定している。

最も変化を追いやるのは高杯である。中期後半の直立して端部に面をもつ口縁のもの（④）から、後期に入るとその面を徐々に外方に拡張し（⑤～⑦）、後期後半になると湾曲しながら外反して素縁に終わるものに移行（⑧）、その後小形化、短脚化をたどる（⑩～⑬）。この変遷は岡山県南部に概ね共通するものであるが、⑦～⑨のような下方に屈曲する脚端部や、脚端部を面取りするものが後期末頃まで残っている（⑯）。

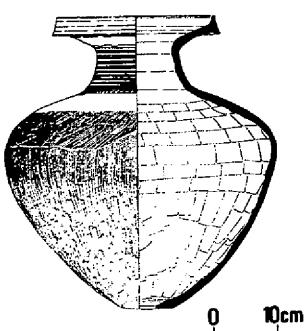
点などは、備中西部の地域的特徴であろう<sup>(3)</sup>。このような高杯の変遷について、口縁端部を若干拡張する段階を後期-a、端部の拡張が外方にさらに大きくなる段階を後期-b、素縁に終わるもの



第44図 矢掛町中地区における弥生時代後期土器の変遷 S=1/12

に移行する段階を後期- c、全体に小形化が進む段階を後期- d、さらに小形化、短脚化が進み杯部が深い形態になる段階を後期- e と仮称する。

土器棺に用いられた壺 (③) は、やや長い頸部に縦ハケメの上から多条の沈線を施したもので、中地区においても数例が存在する。口縁部の形態から①→②の順序が考えられ、②は「白江 I 式」<sup>(4)</sup>として⑤～⑦の高杯と一括とされているから、ほぼ①が後期- a、②が後期- b と考えてよい。③については、口縁部を欠損しているために時期の決定が困難であるが、鳥取県倉吉市大谷・後口谷 1 号墳丘墓<sup>(5)</sup>から、非常に類似した資料が出土している（第45図）。吉備地域からの搬入品と考えられ、中池ノ内遺跡例よりやや頸部が短いものの、全体のプロポーション、大きさ、底径、頸の傾き等、ほぼ同じで、同一時期のものと考えてよい。後口谷 1 号墳丘墓例は口縁部も残存しており、岡山県南部における編年観<sup>(6)</sup>から概ね後期- e 段階に含まれると思われる。後口谷 1 号墳丘墓において共伴する壺、器台については、山陰の「九重式」<sup>(7)</sup>に相当し、やはり後期後半に位置付けられる。



第45図 後口谷 1号墳丘墓  
出土土器 S=1/12

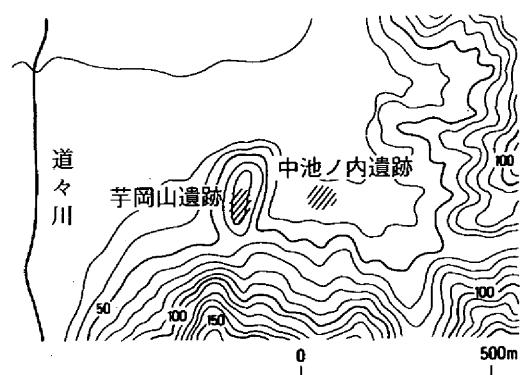
ところが、棺蓋に用いられた⑭の鉢はそれより古い様相をもつ。高杯の口縁部と共に通する形態で、後期- b の新段階ととらえられる。上記の壺と時期差を感じるが、この鉢によって土器棺墓の時期をさかのぼらせるることは難しい。⑮の鉢の口縁形態も③の壺に近い時期のものと思われ、⑭については、古い形態を残すものが後期- e 段階まで残存していると解釈したほうが妥当であろう。高杯の変遷の中で、脚端部などに古い形態をもつものが新しい段階まで残存していることを述べたが、⑭の鉢についても同様で、備中西部の特徴である可能性がある。ただし「白江 II 式」<sup>(8)</sup>と呼ばれる土器群の中には、このような口縁形態をもつ高杯や鉢は認められないことから、後期- e 段階の後半には消滅していると思われ、中池ノ内遺跡の土器棺墓の時期は後期- e の前半と考えられる。

以上から、中池ノ内遺跡の各遺構の時期は、竪穴住居 1 が後期- d の頃、土器棺墓が後期- e の前半頃と考えられる。また、土壙墓 8 出土の直口壺（第14図）が土壙墓群の時期を代表しているとすれば、土器棺墓と同じく後期- e 段階に位置付けられる。したがって、弥生時代後期後葉のある段階に、集落から墓地へと、土地の利用目的が変わったと考えることができる。それ以前の弥生時代中期では、磨製石斧などが包含層より出土していることから集落として利用されていたと思われる。弥生時代以降は、古墳時代前期に、竪穴住居 2 にみられるように再び集落として利用されている。

## 2 土壙墓群について—芋岡山遺跡との比較—

中池ノ内遺跡における土壙墓群について、近接する芋岡山遺跡のものと比較し、その特徴をまとめておきたい。芋岡山遺跡は、中池ノ内遺跡から直線距離にして約200mという非常に近接した位置にあるが、中池ノ内遺跡が丘陵裾部に位置しているのに対して、芋岡山遺跡は平野に向かって突出した丘陵頂部に存在しており、両遺跡の比高差は約40mにもなる（第46図）。いずれも弥生時代後期のもので、時期的に重なる。

ここでは、主軸の方位と規模から両者の比較を試み



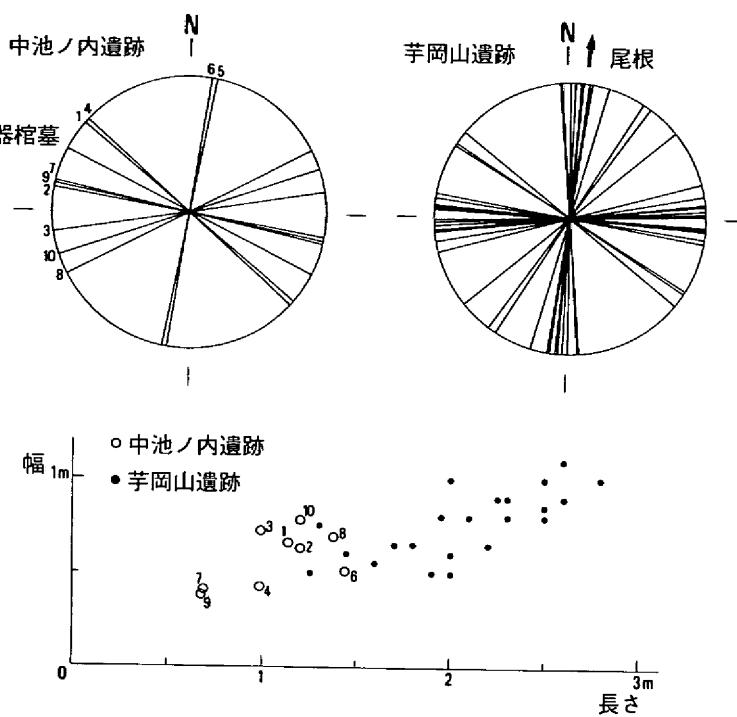
第46図 中池ノ内遺跡と芋岡山遺跡の位置関係

た（第47図）。主軸の方位については、両遺跡とも非常に似通った傾向を示し、東西および南北を指向するものが多い。一般に、弥生時代の土壙墓の主軸は、尾根線に対して平行あるいは直交するものが多く、芋岡山遺跡の場合も尾根線がほぼ南北方向であることから、それに対して平行および直交の方位を示していると考えられる。中池ノ内遺跡の場合も、地形の傾斜はほぼ南北方向であり同様の考え方ができる。このように主軸方位では両遺跡とも類似したあり方を示しているが、規模の面では著しい相違がみられる。このような相違は、おそらく社会的な地位、階層の違いと関連するものと考えられる。

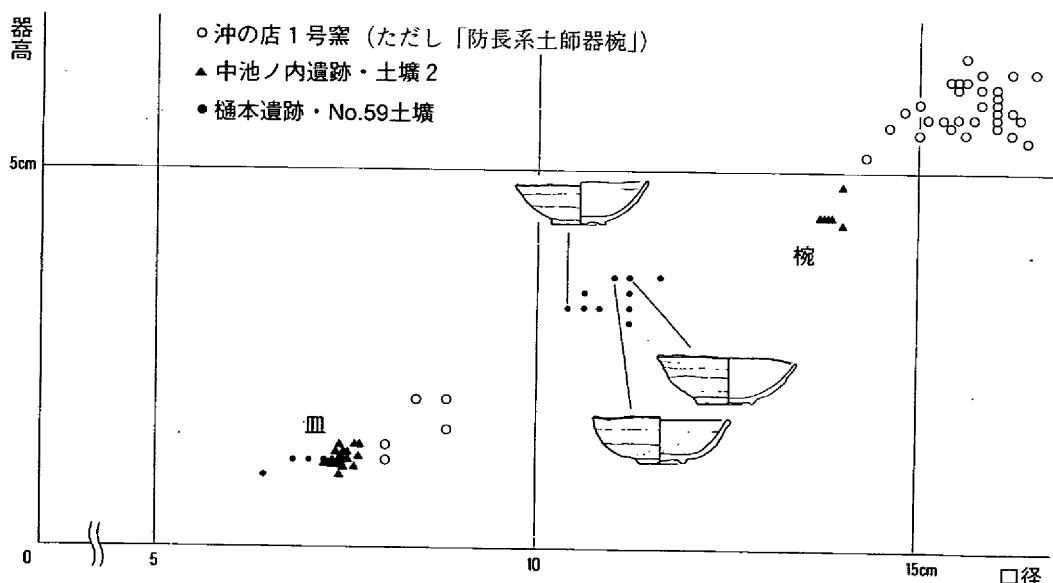
出土遺物をみても、芋岡山遺跡で出土しているような特殊器台をはじめとする大形祭祀土器は中池ノ内遺跡ではみられない。また上述の立地条件の違い（第46図）も大きい。土壙墓の主軸方位の類似性にみられるように、共通の観念のもとに埋葬されながら、墓壙規模、土器、立地にみられるような階層差をもっていると考えられる。

### 3 土壙2出土の中世土師器について

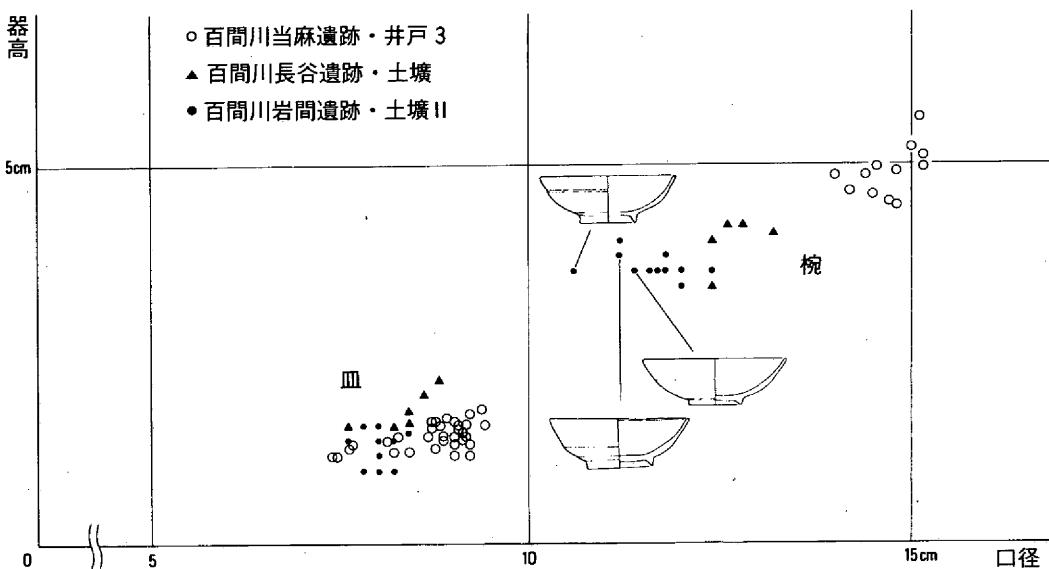
土壙2より、多数の中世土師器が出土した。碗6個体、皿（小皿）21個体がある。いわゆる「早島式」のもので、碗については、最近は「吉備系土師器碗」と呼ばれることが多い<sup>(9)</sup>。このような土師



第47図 土壙墓の主軸方位と規模の比較



第48図 中世土師器の法量分布（備中地域）



第49図 中世土師器の法量分布（備前地域）

器楕の編年作業はかなり進んでおり、法量と調整を中心に整理がなされている<sup>(10)</sup>。すなわち、法量の縮小と器面におけるヘラミガキの省略化である。これらの業績によれば、中池ノ内遺跡土壙2の楕は13世紀初頭頃に位置付けられる。一方、皿については楕に比べて整理が進んでいないようと思われる。楕ほど時期的な変化が著しく表れないことが原因しているのであろう。

第48図・第49図では、楕・皿の両者について、中池ノ内遺跡のものと相前後すると思われる資料について、法量の変化をまとめた。これをみると、備前・備中の両地域で、特に皿の様相において若干の違いが認められるようである。楕の縮小化をそのまま時期差としてとらえることができるならば、備中地域では楕と同様に皿も順次縮小していく状況が読み取れるが、備前地域では皿の法量の縮小化が明確でなくバラつきが大きい。また楕についても、同程度の法量をもつものでも備中地域の方が高台の退化傾向が大きいようである。このような地域性の可能性も含め、今後編年をさらに整理していく必要があろう。その中で、中池ノ内遺跡土壙2の資料は、第48図をみてもわかるように法量の集中度が他の遺跡・遺構に比べて高く、良好な一括資料として重要な意味をもつようと思われる。

## 註

- (1) 間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第1号 1966年
- (2) 間壁忠彦・間壁葭子「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」『倉敷考古館研究集報』第3号 1967年
- (3) 下方に屈曲する脚端部については、高橋護が備中西部の地方色ととらえている。  
高橋護「入門講座・弥生土器—山陽2—」『月刊考古学ジャーナル』175 1980年
- (4) (1)と同じ。
- (5) 森下哲哉『大谷・後口谷墳丘墓発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第40集 倉吉市教育委員会 1985年
- (6) 高橋護(3)文献  
正岡睦夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社 1992年  
高畑知功「備中地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社 1992年 ほか
- (7) 東森市良「九重式土器について」『考古学雑誌』第57巻第1号 1973年
- (8) (1)と同じ。
- (9) 百瀬正恒・橋本久和「中世平安京の土器様相と各地への展開」『月刊考古学ジャーナル』299 1988年
- (10) 山本悦世「吉備南部地域における古代末～中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 1992年 に総括されている。

| 番号 | 種別   | 器種    | 法量(cm)                | 形態・手法の特徴                                      | 胎土                    | 色調                | 丹塗 | 備考     |
|----|------|-------|-----------------------|---|-----------------------|-------------------|----|--------|
| 1  | 縄文土器 | 深鉢    | —                     | 内外面とも横ナデ。刻目突帯文一条。                             | 3mm大以下の砂粒             | 黄褐色～暗褐色           |    |        |
| 2  | 縄文土器 | 深鉢    | —                     | 内外面とも横ナデ。刻目突帯文一条。                             | 1mm大の砂粒               | 黒褐色               |    |        |
| 3  | 弥生土器 | 高杯    | 口径20.6                | 外面縦ミガキ、横ナデ。<br>内面渦巻き状ハケメ後放射状ミガキ。              | 2mm大以下の砂粒             | にぶい橙              | ●  | 鉢として使用 |
| 4  | 弥生土器 | 鉢     | 口径33.1<br>器高21.0      | 外面縦ミガキ。内面ケズリ。<br>口縁部に3条の凹線。                   | 2mm大以下の砂粒<br>5mm大の小石粒 | 外にぶい褐<br>内にぶい橙    | ●  | 土器棺蓋   |
| 5  | 弥生土器 | 鉢     | 推定口径44.0              | 内外面とも縦ミガキ。口縁端部は拡張し、3条の凹線あり。                   | 3mm大以下の砂粒             | にぶい黄橙             | ●  | 土器棺蓋   |
| 6  | 弥生土器 | 壺または甕 | 底径8.0                 | 外面縦ミガキ。内面不定方向ケズリ。                             | 1mm大の砂粒<br>角閃石多       | 外にぶい橙<br>内灰黃褐色    | ●  | 土器棺蓋   |
| 7  | 弥生土器 | 壺     | 胴最大径50.7              | 胴部外面縦ミガキ。頸部縦ハケ+沈線11条。<br>内面ケズリ。               | 2mm大以下の砂粒<br>金雲母・角閃石  | 外にぶい赤褐色<br>内灰褐色   | ●  | 土器棺身   |
| 8  | 弥生土器 | 直口壺   | 推定口径8.0               | 外面上半縦ハケ、下半縦ミガキ。<br>内面上半縦ミガキ、下半縦ミガキ。           | 1mm大の砂粒<br>長石・金雲母多    | にぶい橙              | ●  |        |
| 9  | 弥生土器 | 甕     | 推定口径14.8              | 外面、口縁内面横ナデ。胴部内面横ケズリ。                          | 1mm大以下の砂粒<br>長石・黒雲母多  | 外橙<br>内にぶい橙       |    |        |
| 10 | 弥生土器 | 壺または甕 | 推定底径5.8               | 外面縦ミガキ。内面縦ケズリ。                                | 1~3mm大の砂粒<br>石英・黒雲母多  | 外灰褐色<br>内にぶい橙     |    |        |
| 11 | 弥生土器 | 甕     | —                     | 内外面とも横ナデ。                                     | 0.5mm大以下の砂粒           | 明赤褐色              | ●  |        |
| 12 | 弥生土器 | 甕     | —                     | 内外面とも横ナデ。                                     | 1mm大以下の砂粒             | 橙                 |    |        |
| 13 | 弥生土器 | 高杯    | 推定口径21.0              | 口縁部内外面とも横ナデ。杯部外面斜めハケ、内面横ケズリ。                  | 1mm大以下の砂粒<br>金雲母・黒雲母多 | にぶい橙              | ●  |        |
| 14 | 弥生土器 | 高杯    | —                     | 内外面とも横ナデ。                                     | 1mm大の砂粒<br>長石・黒雲母多    | にぶい橙              | ●  |        |
| 15 | 弥生土器 | 高杯    | —                     | 内外面とも横ナデ。<br>脚柱部面取り。                          | 1mm大以下の砂粒<br>長石多      | 橙                 | ●  |        |
| 16 | 弥生土器 | 高杯    | 推定底径13.0              | 調整不明。脚部穿孔4か所。                                 | 1mm大以下の砂粒<br>長石・石英多   | にぶい橙              |    |        |
| 17 | 弥生土器 | 壺     | —                     | 外面横ナデ+描画文。内面縦ナデ+指押さえ。<br>長石・石英多               | 2mm大以下の砂粒             | オリーブ黒             |    |        |
| 18 | 弥生土器 | 壺     | —                     | 外面縦ミガキ、押し引き状沈線文。<br>内面縦ハケ、若干指頭圧痕が残る。          | 2mm大以下の砂粒<br>長石多      | 外にぶい黄橙<br>内黒褐色    |    |        |
| 19 | 弥生土器 | 壺     | —                     | 断面三角形貼付突帯5条、棒状浮文2条、刻目突帯1条。                    | 3mm大以下の砂粒<br>長石多      | 褐色                |    |        |
| 20 | 弥生土器 | 壺     | 推定口径27.0              | 内外面ともナデ。口縁部内面に描画波状文。口縁端面に沈線7条、棒状浮文3条。         | 2mm大以下の砂粒<br>長石・石英多   | 外にぶい黄橙<br>内にぶい黄褐色 |    |        |
| 21 | 弥生土器 | 壺     | —                     | 内外面とも横ナデ。口縁端面に凹線2条。口縁部内面に描画波状文。頸部四線4条が残存。     | 2mm大以下の砂粒             | にぶい黄橙             |    |        |
| 22 | 弥生土器 | 甕     | 推定口径21.0              | 胴部外面横ハケ後縦ハケ。胴部内面ナデ。口縁内外面とも横ナデ。口縁外面に沈線4条。      | 1mm大の砂粒<br>角閃石多       | にぶい黄橙             |    |        |
| 23 | 弥生土器 | 高杯    | —                     | 内面横ミガキ。外面に貼付刻目突帯、棒状浮文、<br>描画波状文。水平な口縁端面に斜格子文。 | 1mm大以下の砂粒<br>長石多      | にぶい橙              |    |        |
| 24 | 弥生土器 | 高杯    | 推定口径20.0              | 外面縦ミガキ。内面調整不明。                                | 1mm大の砂粒<br>長石・石英多     | 橙                 |    |        |
| 25 | 弥生土器 | 壺     | 推定口径13.0              | 内外面とも横ナデ。口縁端面に沈線3条。                           | 1mm大の砂粒<br>長石多        | 外にぶい橙<br>内橙       |    |        |
| 26 | 弥生土器 | 壺     | 推定口径15.0              | 頸部以上内外面とも横ナデ。<br>胴部外面縦ハケ、内面ケズリ。               | 1mm大の砂粒               | にぶい橙              | ●  |        |
| 27 | 弥生土器 | 壺     | 推定口径12.0              | 外面口縁部横ナデ、頸部以下縦ミガキ。<br>内面頸部以上横ミガキ、胴部ケズリ。       | 1mm大の砂粒<br>長石・角閃石多    | 外にぶい橙<br>内褐色      | ●  |        |
| 28 | 弥生土器 | 甕     | 推定口径14.0              | 口縁部内外面とも横ナデ。胴部外面縦ミガキ、<br>内面ケズリ。口縁端面に凹線2条。     | 1mm大の砂粒<br>長石・石英多     | にぶい橙              |    |        |
| 29 | 弥生土器 | 甕     | 推定口径15.0              | 口縁部内外面とも横ナデ。胴部外面縦ミガキ、<br>内面ケズリ。               | 3mm大以下の砂粒<br>長石・石英多   | にぶい褐              |    |        |
| 30 | 弥生土器 | 甕     | 推定口径14.0              | 内外面とも横ナデ。口縁端部に内傾する幅広い<br>面をもつ。                | 1mm大以下の砂粒             | にぶい褐              | ●  |        |
| 31 | 弥生土器 | 高杯    | 推定口径20.0              | 口縁部内外面とも横ナデ。杯部外面縦ミガキ。<br>口縁端部は拡張し、沈線3条あり。     | 2mm大以下の砂粒<br>長石・石英多   | にぶい褐              | ●  |        |
| 32 | 弥生土器 | 高杯    | 推定口径18.5              | 口縁部内外面とも横ナデ。他は調整不明。                           | 2mm大以下の砂粒<br>長石・石英多   | 橙                 |    |        |
| 33 | 弥生土器 | 高杯    | 推定口径9.8               | 脚柱部外面縦ミガキ。脚端部付近内外面とも横<br>ナデ。                  | 2mm大以下の砂粒<br>金雲母・黒雲母多 | 外にぶい橙<br>内にぶい褐    | ●  |        |
| 34 | 弥生土器 | 高杯    | —                     | 杯部内外面とも横ミガキ。脚柱部面取り。                           | 2mm大以下の砂粒<br>長石・金雲母多  | 外にぶい褐<br>内にぶい橙    |    |        |
| 41 | 土師器  | 壺     | 推定口径8.5<br>推定最大径11.2  | 口縁部内外面・胴部内面横ナデ。口縁部内面に<br>指頭圧痕あり。胴部外面斜めハケ。     | 3mm大以下の砂粒<br>長石多      | にぶい橙              |    |        |
| 42 | 土師器  | 壺     | 推定口径9.0<br>推定最大径9.0   | 口縁部内外面・胴部内面横ナデ。内面には指押<br>さえ、指ナデの跡が残る。         | 4mm大以下の砂粒<br>赤色酸化土粒多  | にぶい黄橙             |    |        |
| 43 | 土師器  | 甕     | 推定口径17.8              | 内外面とも横ナデ。口縁部は二重口縁の退化形<br>態を示し、端部には内傾する面をもつ。   | 1mm大以下の砂粒<br>赤色酸化土粒多  | 浅黃橙               |    |        |
| 44 | 土師器  | 鉢     | 推定口径11.4<br>推定最大径11.8 | 口縁部外面とも横ナデ、一部ハケメのこる。<br>胴外面縦ハケ、指押さえ、内面押さえ、ナデ。 | 3mm大以下の砂粒<br>石英・長石多   | 外橙<br>内にぶい黄橙      |    |        |
| 45 | 土師器  | 鉢     | 推定口径11.9<br>△胴最大径10.8 | 口縁部内外面とも横ナデ。胴外面縦ハケ、内面<br>指押さえ、ナデ。             | 2mm大以下の砂粒             | 橙                 |    |        |
| 46 | 土師器  | 甕     | 推定口径15.2              | 口縁部内外面横ナデ。胴部外面斜めハケ、内面<br>ケズリ。                 | 3mm大以下の砂粒<br>長石多      | 外にぶい黄橙<br>内にぶい褐   |    |        |
| 47 | 土師器  | 甕     | 推定口径16.8              | 内外面とも横ナデ。口縁端部に内傾する面を明<br>瞭にもつ。                | 3mm大以下の砂粒<br>長石多      | にぶい黄橙             |    |        |
| 48 | 土師器  | 高杯    | —                     | 外面、杯部内面横ナデ。脚柱部内面ケズリ。                          | 3mm大以下の砂粒<br>長石多      | 外にぶい赤褐色<br>内にぶい橙  |    |        |

第1表 縄文時代～中世の土器観察表(1)

| 番号 | 種別  | 器種 | 法量(cm)                   | 形態・手法の特徴                                   | 胎土                  | 色調          | 丹塗 | 備考 |
|----|-----|----|--------------------------|--|---------------------|-------------|----|----|
| 49 | 土師器 | 高杯 | 推定口径12.7                 | 調整不明だが、内外面ともナデと思われる。                       | 1mm大の砂粒<br>長石多      | 澄           |    |    |
| 50 | 土師器 | 高杯 | 一                        | 内外面ともナデ。                                   | 2mm大以下の砂粒<br>長石多    | にぶい橙        |    |    |
| 51 | 須恵器 | 杯蓋 | 推定口径11.8                 | 内外面とも横ナデ。天井部はヘラ切り未調整。                      | 精緻<br>1mm大の黒色砂粒     | 黄灰          |    |    |
| 52 | 須恵器 | 杯身 | 推定口径11.0<br>推定最大径12.9    | 内外面とも横ナデ。底部はヘラ切り未調整。                       | 精緻<br>1mm大の砂粒       | 灰           |    |    |
| 53 | 須恵器 | 杯身 | 口径9.8、最大径<br>11.6、器高3.4  | 内外面とも横ナデ。底部はヘラ切り未調整。                       | 精緻<br>2mm大の砂粒       | 青灰          |    |    |
| 54 | 須恵器 | 高杯 | 一                        | 内外面とも横ナデ。脚部には1条の沈線あり。                      | 精緻                  | 灰白          |    |    |
| 55 | 須恵器 | 臺  | 一                        | 外面横ナデ。内面頸部横ナデ、胴部同心円当具痕。                    | 精緻<br>5mm大以下の砂粒     | 外灰~灰白<br>内灰 |    |    |
| 56 | 須恵器 | 臺  | 一                        | 外面平行タタキ+縦ハケ。内面同心円当具痕。                      | 1mm大の砂粒             | 灰白          |    |    |
| 57 | 須恵器 | 臺  | 一                        | 外面格子目タタキ後、縦ハケ後、カキメ。<br>内面車輪文当具痕。           | 精緻<br>1mm大の砂粒僅か     | 外暗灰<br>内灰   |    |    |
| 58 | 須恵器 | 甕  | 一                        | 外面格子目タタキ後ナデ?<br>内面同心円当具痕。                  | 3mm大以下の砂粒<br>石英・長石多 | 外青灰<br>内灰   |    |    |
| 60 | 土師器 | 椀  | 口径13.8~14.2<br>器高4.3~5.3 | 口縁外面、内面、高台内外面横ナデ。外面下半指頭圧痕。内面仕上げナデあり。重ね焼き痕。 | 3mm大の白色砂粒           | 灰白          |    |    |
| 61 | 土師器 | 椀  | 口径13.8~14.2<br>器高4.1~4.5 | 口縁外面、内面、高台内外面横ナデ。外面下半指頭圧痕。内面仕上げナデあり。重ね焼き痕。 | 5mm大の白色・赤色砂粒多       | 淡い灰黄褐       |    |    |
| 62 | 土師器 | 椀  | 口径13.6~14.1<br>器高4.2~4.8 | 口縁外面、内面、高台内外面横ナデ。外面下半指頭圧痕。内面仕上げナデあり。重ね焼き痕。 | 4mm大の白色砂粒多          | 灰黄褐         |    |    |
| 63 | 土師器 | 椀  | 口径13.4~14.2<br>器高4.2~4.6 | 口縁外面、内面、高台内外面横ナデ。外面下半指頭圧痕。内面仕上げナデあり。重ね焼き痕。 | 4mm大の白色砂粒多          | 灰白          |    |    |
| 64 | 土師器 | 碗  | 口径13.6~13.9<br>器高4.1~4.7 | 口縁外面、内面、高台内外面横ナデ。外面下半指頭圧痕。内面仕上げナデあり。重ね焼き痕。 | 5mm大の白色砂粒           | 灰黄褐         |    |    |
| 65 | 土師器 | 碗  | 口径13.5~13.9<br>器高4.1~4.7 | 口縁外面、内面、高台内外面横ナデ。外面下半指頭圧痕。内面仕上げナデあり。重ね焼き痕。 | 3mm大の白色砂粒多          | 灰白          |    |    |
| 66 | 土師器 | 皿  | 口径7.6~7.7<br>器高1.2~1.6   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。      | 砂粒多<br>7mm大の赤色砂粒    | 灰白          |    |    |
| 67 | 土師器 | 皿  | 口径7.5~7.8<br>器高1.1~1.7   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部仕上げナデ。重ね焼き痕あり。 | 細かい白色砂粒             | にぶい黄澄       |    |    |
| 68 | 土師器 | 皿  | 口径7.5~7.7<br>器高1.3~1.5   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部仕上げナデ。重ね焼き痕あり。 | 細かい白色砂粒多            | にぶい黄澄       |    |    |
| 69 | 土師器 | 皿  | 口径7.6~7.7<br>器高1.1~1.4   | 底部外面ヘラ切り。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。             | 4mm大の白色砂粒           | 淡黄澄         |    |    |
| 70 | 土師器 | 皿  | 口径7.3~7.5<br>器高1.3~1.5   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。      | 5mm大の白色砂粒           | 灰白          |    |    |
| 71 | 土師器 | 皿  | 口径7.3~7.7<br>器高1.1~1.5   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。      | 白色砂粒多               | 浅黄澄         |    |    |
| 72 | 土師器 | 皿  | 口径7.2~7.6<br>器高1.2~1.6   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部仕上げナデ。重ね焼き痕あり。 | 4mm大の白色砂粒           | にぶい黄澄       |    |    |
| 73 | 土師器 | 皿  | 口径7.4~7.5<br>器高1.2~1.4   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部仕上げナデ。重ね焼き痕あり。 | 砂粒多<br>5mm大の白色砂粒    | 浅黄澄         |    |    |
| 74 | 土師器 | 皿  | 口径7.3~7.7<br>器高1.0~1.4   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部仕上げナデ。重ね焼き痕あり。 | 砂粒多<br>4mm大の白色砂粒    | 浅黄澄         |    |    |
| 75 | 土師器 | 皿  | 口径7.3~7.4<br>器高1.2~1.4   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部仕上げナデ。重ね焼き痕あり。 | 細かい白色砂粒             | 灰白          |    |    |
| 76 | 土師器 | 皿  | 口径7.5~7.6<br>器高0.9~1.3   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。      | 3mm大の白色・赤色砂粒        | 灰白          |    |    |
| 77 | 土師器 | 皿  | 口径7.4~7.5<br>器高1.0~1.4   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。      | 白色砂粒                | 灰白~浅黄澄      |    |    |
| 78 | 土師器 | 皿  | 口径7.3~7.5<br>器高1.0~1.4   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部仕上げナデ。重ね焼き痕あり。 | 細かい白色砂粒             | 灰白          |    |    |
| 79 | 土師器 | 皿  | 口径7.3~7.6<br>器高0.8~1.4   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。                    | 白色砂粒多               | 浅黄澄         |    |    |
| 80 | 土師器 | 皿  | 口径7.3~7.6<br>器高1.0~1.2   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。      | 5mm大の白色砂粒           | 浅黄澄         |    |    |
| 81 | 土師器 | 皿  | 口径7.2~7.6<br>器高1.0~1.3   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。      | 3mm大の白色砂粒多          | 灰白          |    |    |
| 82 | 土師器 | 皿  | 口径7.2~7.4<br>器高1.1~1.3   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。      | 細かい白色砂粒多            | 浅黄澄         |    |    |
| 83 | 土師器 | 皿  | 口径7.3~7.4<br>器高1.0~1.3   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。      | 細かい白色・赤色砂粒多         | 灰白          |    |    |
| 84 | 土師器 | 皿  | 口径7.4<br>器高0.9~1.1       | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。      | 細かい白色砂粒多            | 外灰白<br>内明黄澄 |    |    |
| 85 | 土師器 | 皿  | 口径7.2~7.3<br>器高1.0~1.3   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。      | 細かい白色砂粒多            | 浅黄澄         |    |    |
| 86 | 土師器 | 皿  | 口径7.0~7.4<br>器高0.9~1.4   | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。      | 3mm大の白色・赤色砂粒多       | 黄澄          |    |    |
| 87 | 土師器 | 椀  | 推定口径14.9<br>器高5.6        | 内外面横ナデ+横ミガキ。底部内面のミガキは一定方向。底部外面指押さえ。高台横ナデ。  | 3mm大以下の砂粒           | 灰白          |    |    |
| 88 | 土師器 | 椀  | 高台径6.0                   | 内外面ともナデ。                                   | 1mm大の砂粒             | 灰白          |    |    |
| 89 | 土師器 | 椀  | 高台径6.4                   | 内外面ともナデ。底部外面は指押さえ、ナデ。                      | 3.5mm大以下の砂粒         | 橙           |    |    |
| 90 | 土師器 | 椀  | 高台径5.8                   | 内外面ともナデ。底部外面は押圧。                           | 1mm大の砂粒             | 灰白          |    |    |
| 91 | 土師器 | 椀  | 高台径4.9                   | 内外面ともナデ。重ね焼きの痕跡あり。                         | 1mm大の砂粒             | 外灰、内灰白      |    |    |
| 92 | 土師器 | 椀  | 高台径4.8                   | 内外面ともナデ。重ね焼きの痕跡あり。                         | 4mm大の砂粒僅か           | 灰白          |    |    |

第2表 縄文時代～中世の土器観察表(2)

| 番号  | 種別            | 器種     | 法量(cm)         | 形態・手法の特徴                                | 胎土                   | 色調             | 丹塗 | 備考 |
|-----|---------------|--------|----------------|---|----------------------|----------------|----|----|
| 93  | 土師器           | 椀      | 高台径4.3         | 内外面ともナデ。外面一部指頭圧痕。重ね焼きの痕跡あり。高台は薄く、端部は尖る。 | 1mm大の砂粒少量            | 外にぶい黄橙<br>内浅黄澄 |    |    |
| 94  | 土師器           | 皿      | 口径7.5<br>器高1.2 | 底部外面ヘラ切り。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。重ね焼き痕あり。  | 2mm大以下の砂粒<br>長石多     | 外にぶい黄橙<br>内浅黄橙 |    |    |
| 95  | 土師器           | 皿      | 口径6.8<br>器高1.2 | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。   | 1mm大以下の砂粒<br>赤色粒・長石多 | 外浅黄橙<br>内にぶい黄橙 |    |    |
| 96  | 土師器           | 皿      | 口径7.1<br>器高1.2 | 底部外面ヘラ切り後、板状の圧痕。その他横ナデ。内面中央部に仕上げナデあり。   | 2mm大以下の砂粒<br>石英多     | 浅黄橙            |    |    |
| 97  | 瓦質土器<br>(亀山焼) | 鍋または焰燒 | -              | 内面横ハケ。外面縦ハケ後、指押さえ。口縁端部は内外面とも横ナデ。        | 1mm大の砂粒<br>長石多       | 灰              |    |    |
| 98  | 瓦質土器<br>(亀山焼) | 羽釜     | 推定口径28.0       | 口縁部外面縦ハケ後、指押さえ。その他は調整不明。口縁端部は拡張して面をもつ。  | 2mm大以下の砂粒<br>長石・石英多  | にぶい黄橙<br>~灰    |    |    |
| 99  | 備前焼           | 摺鉢     | -              | 内外面とも横ナデ。6条1単位(幅2cm)のおろし目。              | 3mm大以下の砂粒            | 外にぶい黄褐<br>内灰褐  |    |    |
| 100 | 瓦質土器<br>(亀山焼) | 摺鉢     | -              | 内外面とも横ナデ。おろし目6条が残存。                     | 1.5mm大以下の砂粒          | 灰              |    |    |
| 101 | 白磁            | 碗      | -              | 内外面施釉。口縁部は玉縁状。                          | 精緻                   | 灰白             |    |    |
| 102 | 青磁            | 碗      | 推定口径18.0       | 内外面施釉。外面鏡運弁文。                           | 精緻                   | オリーブ灰          |    |    |
| 103 | 青磁            | 碗      | 推定口径14.8       | 内外面施釉。外面鏡運弁文。                           | 精緻                   | 灰オリーブ          |    |    |
| 104 | 青磁            | 碗      | 高台外径5.5        | 内外面施釉、ただし高台外面は一部無施釉、高台接地面・高台内は無施釉。      | 精緻                   | オリーブ黄          |    |    |

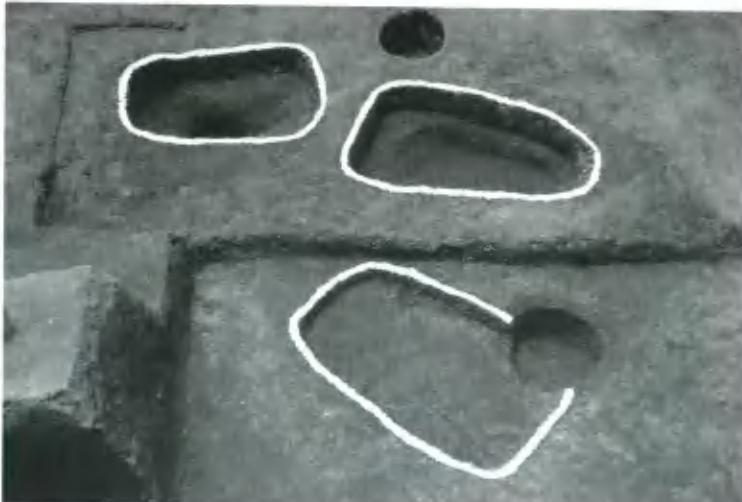
第3表 繩文時代～中世の土器観察表(3)

## 報告書抄録

|                      |   |                    |                             |                                   |                      |                        |                       |  |
|----------------------|---|--------------------|-----------------------------|-----------------------------------|----------------------|------------------------|-----------------------|--|
| ふりがな                 | なかいけのうちいせき                                  |                    |                             |                                   |                      |                        |                       |  |
| 書名                   | 中池ノ内遺跡                                      |                    |                             |                                   |                      |                        |                       |  |
| 副書名                  | 主要地方道倉敷成羽線建設に伴う発掘調査                         |                    |                             |                                   |                      |                        |                       |  |
| 卷次                   |   |                    |                             |                                   |                      |                        |                       |  |
| シリーズ名                | 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告                              |                    |                             |                                   |                      |                        |                       |  |
| シリーズ番号               | 108   |                    |                             |                                   |                      |                        |                       |  |
| 編著者名                 | 尾上元規・正岡睦夫                                   |                    |                             |                                   |                      |                        |                       |  |
| 編集機関                 | 岡山県古代吉備文化財センター                              |                    |                             |                                   |                      |                        |                       |  |
| 所在地                  | 〒701-01 岡山県岡山市西花尻1325-3                     |                    |                             |                                   | TEL 086-293-3211     |                        |                       |  |
| 発行機関                 | 岡山県教育委員会                                    |                    |                             |                                   |                      |                        |                       |  |
| 所在地                  | 〒700 岡山県岡山市内山下2-4-6                         |                    |                             |                                   | TEL 086-224-2111     |                        |                       |  |
| 発行年月日                | 西暦 1996年3月31日                               |                    |                             |                                   |                      |                        |                       |  |
| ふりがな<br>所収遺跡名        | ふりがな<br>所 在 地                               | コード                | 北 緯                         | 東 經                               | 調査期間                 | 調査面積<br>m <sup>2</sup> | 調査原因                  |  |
| なかいけのうちいせき<br>中池ノ内遺跡 | おかやまけんおだぐん<br>岡山県小田郡<br>かばぢょうなか<br>矢掛町中1415 | 市町村<br>33461       | 遺 跡<br>番 号                  | 。 , ”                             | 34度<br>36分<br>04秒    | 133度<br>36分<br>39秒     | 19950531～<br>19950713 | 400<br>主要地方道<br>倉敷成羽線<br>建設に伴う<br>事前調査 |
| 所収遺跡名                | 種別  | 主な時代               | 主な遺構                        | 主な遺物                              | 特記事項                 |                        |                       |  |
| 中池ノ内遺跡               | 集落  | 弥生時代<br>古墳時代<br>近世 | 堅穴住居 1軒<br>△ 1軒<br>掘立柱建物 1棟 | 弥生土器・土師器・<br>須恵器・中近世陶<br>磁器・石器・鐵器 | 中世の土師器多数を<br>おさめた土壙等 |                        |                       |  |
|                      | 墓   | 弥生時代               | 土器棺墓 1基<br>土 墓 10基          |                                   |                      |                        |                       |  |
|                      | その他   | 中・近世               | 土 墓 12基                     |                                   |                      |                        |                       |  |



図版2



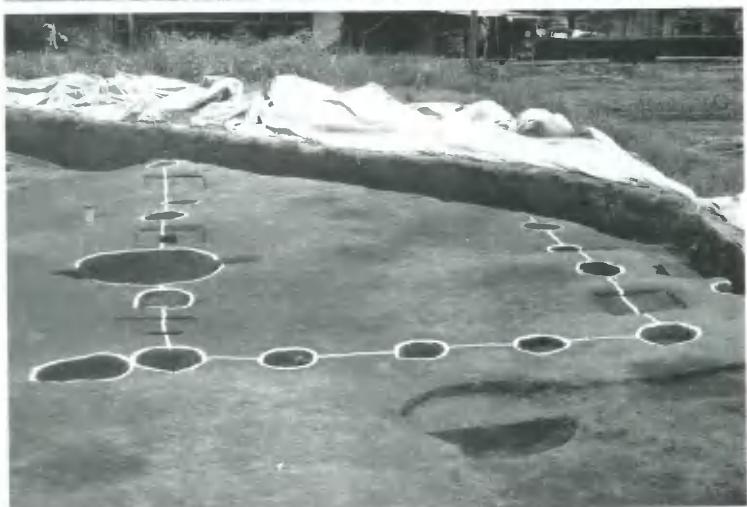
1. 土壌墓1～3（北から）



2. 土壌墓5～9（北から）



3. 土壌墓10（南から）



# 図版 4



1. ピットb瓦出土状況



2. 土壌5断面



3. 土壌6断面



4. 土壌7



5. 土壌8断面



6. 土壌8礫出土状況



7. 土壌9礫出土状況



8. 発掘作業風景



1. 包含層出土縄文土器



2. 壇穴住居 1 出土遺物



3. 土壌 1 出土遺物



4. 土器棺・壺（棺身）



5. 土器棺・鉢（棺蓋）



6. 包含層出土の石器



7. 壇穴住居 2 出土遺物



9. 包含層出土の古墳時代の遺物

# 図版 6



1. 土壌 2 出土遺物



2. 包含層出土の中世の遺物



3. 近世の陶磁器



4. 近世の瓦

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 108

## 中池ノ内遺跡

主要地方道倉敷成羽線  
建設に伴う発掘調査

平成8年3月20日 印刷  
平成8年3月31日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター  
発 行 岡 山 県 教 育 委 員 会  
印 刷 旭 総 合 印 刷 株 式 会 社